

関山

かんざん

第20号



寺報 中尊寺

寺報 グラビア			
和(やわらぎ)	貫首 山田 俊和	6	
前の座主 渡邊惠進大僧正 祝下を偲んで	小堀 光實	9	
中尊寺西行祭短歌会記念講演	講師 小池 光	12	
「短歌のたのしさ」	講師 正木ゆう子	27	
第五十三回 平泉芭蕉祭全国俳句大会 記念講演	講師 小川 彰	44	
「翼を仰ぐ」	影山 絃子	46	
中尊寺薪能の薪奉行を務めて	小賀坂勝美	48	
中尊寺茶会を終えて	菅野 澄円	51	
長瀬さんのこと	島田 祐悦	59	
古道踏査報告	菊池 國雄	62	
清原氏のふるさと横手から、	北嶺 澄照	68	
平泉中尊寺に寄せる熱い思い	小野寺郁夫	73	
秀衡街道沿いの中尊寺ハス	破石 晋照	77	
心がけより言葉がけ	菅原 信行	79	
まちづくり活動	千葉 明	83	
三陸郷土芸能奉演開催報告			
平和祈念沖繩大会に参加して			
中尊寺総代長をつとめ終えて			

風信・語録			
執心の至芸「釣狐」を観る	佐々木邦世	85	
風信・語録 「平泉での日々」	武藤 健一	86	
関山植物誌(6)	破石 晋照	89	
〔福聚教会・中尊寺支部便り〕			
「平和祈念沖繩大会」に思う	清水 真澄	90	
新刊紹介			
関山句囊・歌籠			
御神事能番組			
陸奥教区宗務所報			
執務日誌抄			
御奉納者御芳名			
浄財御奉納者御芳名			
不動尊篤信御奉納者御芳名			
〔表紙〕 古楽面「老女」			
鎌倉後期の作と見られる。中尊寺鎮守白山社の 祭礼に際し、中尊寺衆徒によって奉納される延年 「古式式三番」中の「老女」に用いられる面。歳 を重ねた素朴でにこやかな老婆は、鬘と鈴を振 り、五穀豊穡を祈願する。			

喜多流
中尊寺 薪能

平成二十六年八月十四日



「花 月」(佐々木多門師)
少年の花月は
芸能で仏の教えを広めた
半僧半俗の喝(か)食僧。
「羯鼓」を胸につけ、
可憐な遊狂の舞尽くしが
夕闇老杉の天に響いた。
みちのく 夏の風物詩

撮影・山口宏子



おくのほそ道の風景



陸前高田市の献花台にて回向 (3/3)



本堂御本尊開眼一周年記念護摩供 (3/24)



狂言「梟山伏」
一山子弟菅原光哉君初舞台 (5/4)



書作品「夢」
金澤翔子様 御奉納



東日本大震災物故者追善復興祈念法要供茶 表千家流水月会 (10/22)



久世旭如氏による筑前琵琶奉納演奏 (6/1)



平和の合作絵画を描く会 (8/15)



恒例春の藤原まつり 稚児行列 (5/1)



駐日エジプト・アラブ共和国大使館特命全権大使
ヒシャム・エルジメティー氏来山 (9/7)



寒行托鉢 寒の入りより節分まで
平泉町内にて寒行托鉢を行った (1/5~2/3)

和（やわらぎ）

中尊寺貫首 山田俊和

いま、世界の人々が、思いおこさなければならぬのは、「和」の心です。人の心を理解し、争うことなく、共に尊重しあい、協力しあう和の心が、世界に真の平和と幸福をもたらすと信じます。

「和をもって貴しとなす」は、聖徳太子十七条憲法の第一条の冒頭語で、第二条では篤く三宝を敬え、と述べています。この十七条憲法は、日本初の成文法で、日本国家存立の根本的理念を宣言したものです。深く仏教に帰依した太子は、仏教を統治の基本に置き、人々の信仰心、倫理性を高めて政教一致の思想を築き、人の守るべき道を示しています。日本人の心に、この和を大切にすることが脈々と受け継がれて来ています。

聖徳太子が目指した和の国は、釈尊のさとりの心である慈悲の心をもって和合する国、即ち仏国土の建設です。

維摩経仏国品には、衆生によって仏土があり、衆生の素直な心（直心） 深く道を求める心（深心）人の痛みを分かちあう心（大悲心）が仏国土（浄土）を作るとあります。

また釈尊は、六波羅蜜を守り、行ずること。即ち、施す心、いましめを守る心、堪え忍ぶ心、静か

に思慮する心、智慧の心、を養うことが仏国土を作ると説かれています。平和と幸福の国、即ち仏国土を作ろうと発心し、一人の心に育った仏国土は、家庭から町、国、世界へと広がり、そのともされた一つの燈が、次々に広がるように努力を続けなくてはなりません。

さて今日の世相を見ますに、不安定で心配の種は尽きません。世界各地に発生する紛争、難民、飢餓、疫病そして自然災害。エネルギー、食料の不足。民族、国家、宗教の間には越えなくてはならない問題がたくさんあります。

私達は、誰もが等しく自然に抱かれ、多くの人々の協力の中で生かされ生きています。釈尊は、この世に生れる全ての生きとし生けるものは、みな平等に仏に成る性質を持って生れ、いつか必ず仏に成る尊い存在である、と説かれています。また人間は、互いに協力しあって生きる存在ですから、自分自身の存在は、多くの人に支えられ、同時に多くの人を支えています。

平和で幸福に満ちた仏国土を作るためには、一人一人が先ず心の中に、仏国土を作るとの強い心を持ち、和の心、釈尊の慈悲の心を持って和合せよとの教えを実践することです。慈悲とは、釈尊のおさとりで、全ての人々の苦を取り除き、楽を与える。人々と共に喜び、人々と共に悲しむ、ということです。また和合するということは、慈悲の心を持って、助け合い、尊重しあい、宥しあい、語りあい、行動することです。

私達の生きる世界は、同じ人間でありながら、それぞれに生活環境は異なり、言語も文化も千差万別です。その価値観の違いは、不安を生じさせ、混乱をまねきます。その不安と混乱を乗り越え、信

頼関係を築くには、共に和の心、慈悲の心を持って和合するの心を確認しあうことです。
争いのない、苦しみ、悲しみ、悩みのない、貧り、瞋り、愚かさのない、慈悲にあふれる国を作ろうと発心し、絶えることのない努力精進をすることが、私達に課せられています。



前の座主 渡邊惠進大僧正 猥下を偲んで

小堀 光實

昨年十一月五日、毎年この頃に比叡山上は延暦寺会館で開催される天台宗の住職・教師七十五歳以上の方々が集う延寿会えんじゅかいを楽しみにされていた渡邊猥下は、総会の場にこそはご出席なりませんでしたが、その後の一同が会しての懇親夕食会に半田孝淳座主猥下とお揃いでご臨席。

去る十一月二日に百四歳の誕生日を迎え、お蔭様でこの様に元気に過しております。今日、皆さんとお逢い出来て大変嬉しく思います、楽しみにして参りました。

と、用意された祝いの精進料理に箸を進められ、次から次と祝酒を持って御席にみえる方々の盃を受けておられたのです。

ですから、その八日後の十一月十三日早朝の猥下急逝の報せは私のみならずその時一緒でありま



した木下宗務総長ほか一宗、延暦寺の当局関係者の誰もが耳を疑うものでありました。

延寿会の折、懇親会までの待ち合わせの間、田座主猥下とのお話の中で「百四歳になっても、まだまだこれから勉強」と仰言せになつておられたその意気込みを、懇親会の席で半田座主猥下が

ご紹介されていたことが、今や懐かしく尊いお言葉となりました。

抑々、私が渡邊猯下を知るようになりましたのは、今は亡き私の師父（小掘光詮）と同世代の延暦寺住職同志で結成された心友会を通してのことでした。今から五十年ほど前になりましたでしょうか。会の最年長者は桜井惠暢、森定慈紹、佐々木光龍、池山一切圓、菅田玄昭、生田孝憲各師の方々でした。師父が一番若手で、渡邊猯下は師父の干支成歳のひと回り上でありましたから、会の中では上から三番目位でなかったかと思えます。

この心友会のご住職方は全て、既婚妻帯。私が知る頃には所謂寺庭婦人の奥方と、どなたかご夫婦と二組幹事役となつて一年に一度一泊旅行にお出掛けされました。一番記憶にあるのが、松茸山に入つてその茸を採つて食事会を催したことです。渡邊家には大きいお兄ちゃんと小さいお兄ちゃん、そして私の姉と同一歳のお姉ちゃんがいる、楽しい雰囲気伝わるおじさん（失礼）の渡邊猯下の父親振りでありました。

私が比叡山中学校に入学の折、広島県は因島から一人の少年が円乗院（当時の猯下住職名）に住み込み、同じく比叡山中学校に入学することとなりました。

「小掘君、この子は観道つて云うんや、わしの弟子にするから仲良くしてや!!」と、紹介された少年は背丈も体格も私と殆ど変わらない、小さな男子でした。「よくこの歳で親元を離れて叡中に来たな」と感心するほど、しっかり者で、その後円乗院さんに言われるまでもなく直ぐに仲良くなりました。ですから彼の処（円乗院）によく遊びに行きましたし、猯下の奥様（むつさん）も本当に優しく見守つて下さつていました。「ああ、彼は弟子小僧であるのに家族同様に育てられているなあ」と、小僧生活の一端をそう思えた程でした。彼とはその後、中学、高校を通して同クラス。大学も同学部の専攻で、比叡山の籠山修行も全く同期と、切つても切れない縁が今に続いております。渡邊猯下の「仲良くしてや」と掛けられた言葉の威力は凄いものと、二人して延暦寺の新住職

となつた時はお互いに感心し合つたものでした。

延暦寺の在住職としてお互いに切磋琢磨して十数年が経つた時、彼はふる里の寺をやはり継がねばならないこととなり、渡邊家から離れ、延暦寺一山在住職も辞することになってしまいました。彼は、天台寺門宗の流れをくむ修験道教派の一宗、験乗宗の座主となられて、今その本山護持に勤められています。

実は、渡邊猯下のお優しさや、ほほえましさ、時として見せられた大きな口を開けての笑顔はその頃までで、天台座主になられてからは、私ども延暦寺住職、とり分け若い住職には伝教大師さまの僧としての覚悟、戒についてお話をさる機会が大変多くなりました。

「山の住職は、昔から菩薩戒経を必ず読んだもんや。今は、読まんからいかんや」と。別のお話をしておられても必ず話の流れはそこへ落ち着くのでした。

平成十五年、天台宗開宗千二百年大法会に「梵網菩薩戒経」を宗内寺院に改めて配布することに

なつたのも猯下の深意がもたらしたものでしたし、特に、晩年八月の夏を迎える頃になると、戦争の辛いご経験からでしょう、「人の命を大事にするのが坊さんの使命。人の命にとどまらず全ての生命を大切にするのが宗教者の使命である」と諭されることが常で、「戒を保て」は猯下を語るに忘れてはならない言葉です。御法名に「淨戒慈心院」との院号を称され、正に、その通りでありました。

蛇足になりますが、猯下は延寿会の御席でもそうでありましたが、お酒はお強くないものの、小盃で召し上がるのがお好きだったようです。こればかりは良薬とされたのでありましようから、小輩も真似をさせていただいております。

合掌

プロフィール

こぼり こうじつ

比叡山延暦寺執行

寂光院住職

「短歌のたのしさ」

講師 小池 光先生

皆さん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました小池光です。向こう正面、床の間の掛け軸に「仏心」と書いてあります。仏の心の掛け軸を前にお話するのは甚だプレッシャーで、あまり向こうを見ないようにします、か。(笑)



今日は、主催者のほうから、選評の前に、西行について語って欲しい、と言われておりましたので――。
短歌というのは一三〇〇年前から五七五七七でやってきたわけなんですけれども、一三〇〇年ですからね。気の遠くなるような。ただ、その中身は何回か大きく変わっているんです。今、我々がつくっているような短歌というのは、昔の和歌とは全く違うのです。

例えば、震災の歌が今回もいっぱいありましたけれど、昔の『万葉集』とか『新古今集』とか、いくら開いても、地震の歌なんて一首もありません。では、昔はそういう災害がなかったか、といえばそんなことはないわけで、ある意味で今よりも遥かに厳しい。特に西行が生きていた時代は、平安時代から鎌倉時代へと、ものすごく社会が変わって大変だったと思います。でも、そういうところを生きていた人の歌なんだけれども、時代の辛さとかそういうものは、表には絶対に出てこな

い。地震があっても、津波があっても、そういうものを詠むのは歌じゃない、という感じ。だから、昔の人は、歌にするものと、しないものがはっきり分かれていたわけで、それが今の私たちはよくわからなくなってきた。

私は、いわゆる近代短歌といわれるものは少しは知っているつもりですが、一人の読者として『新古今集』などは一応読んだことはあるけれども、開いてみると、西行の歌だけがちょっと他の人と違う、そんな感じがします。

他の人は徹底して言葉でできていて、言葉だけの世界の歌なんだけれど、西行だけは何かちょっと言葉以外にもみ出すものがある、それを人生と言っているのか、現実と…、現実なんていう言葉は新しい言葉で、昔の人に言うべき言葉じゃないんだけれども、現実というか、生活というか、何かそんなものがちょっと西行の歌にだけ感じられるような気がして、ね。だから、西行の歌というのは、他の歌人よりは読んでわかるような気がしました。

いずれにしても、日本の文学史を辿れば俳諧(俳句)には、松尾芭蕉という大きな山があって、全てが芭蕉に集約するでしょう。それで、その芭蕉の奥に何かあるかと言えば、和歌の世界に西行がいるんですね。だから、芭蕉―西行。もっとうりゃ柿本人麻呂とか、そういうふうな大きな峰が、日本の詩歌の、文学史を支えているわけだけれども、その芭蕉と西行が共に平泉を訪ねて、ここで有名な歌を句をそれぞれ残しているわけです。ここで今日お話することができるとも、大変光栄に思っております。

まず、好きな西行の歌を一首だけご紹介します。

古畑のそばの立つ木にゐる鳩の友呼ぶ声
のすゞき夕暮れ

(『山家集』)

これは今から八百年ぐらい前の歌です。鎌倉時代ののはじめの歌。わかりやすい歌ですね。「古畑」というのは古い畑、昔からある畑。「そばの」というのは誤解されるんだけれど、今も言いますね、

隣にある、家の側、の「そば」ね。その「そば」だと思つて読むと、これは間違いで、「そば」というのは昔の言葉で「岨さへ」、斜面のことです。だから、古畑があつて、その斜面に木が立っていて、そこに鳩がいる、と。山鳩がいて、それが「友を呼ぶ声のすぎ夕暮れ」、鳩がポーポー、デッポウポウと鳴いているのが、友達を呼んでいるようで、すごい夕暮れだ、という歌なのですが、ここで私が何に感心したかという、「すぎき」という言葉です。これは私が知る限り西行しか使っていないです。

この「すぎき」というのは今の「すぎい」とほとんど同じ意味だと思えますね。今の若者言葉で「すぎい」というのは変っているんだよね。「すぎーい」とか、「超すぎーい」とか。(笑)その「すぎい」とまさに同じ「すぎき」なので、電車の中で女子高生が「すぎーい」なんて言っていると、あ、西行がいる、と思っちゃう。(笑)

そんな感じで、この言葉は全然変わっていないです。言葉はどんどん変わる言葉もあるし、変わ

らない言葉もある。「すぎい」なんていう言葉はたぶん変わらない言葉でしょう。

そういう言葉を、和歌の中に入れて使っている西行は、革新的な歌人とも言えるでしょう。

この風景というのは今でも、私は鳩が好きで、『山鳩集』という歌集をこの前つくつただけども、よく鳩が家の側で鳴きますよね。あの声というのは独特の哀歓とともに、何か秘密めかしたものがあつて好きなんだけれども、それを思わせません。

「友を呼ぶ声のすぎ夕暮れ」というのは、今の私たちが使う短歌のフレーズとしても、ほとんど違和感がありません。

さて、近代短歌は正岡子規です。この人が短歌を全部新しくした。私たちの短歌を訪ねていくとどこに行くか、というと、正岡子規に行くんです。正岡子規がつくつたみたいな歌を、私たちが今つくっているんです。決して私たちの歌を辿って行つても西行には行かない。そこには巨大な断絶

があるんです。

子規というのは、私の尊敬止まない人だけれど、明治の初めに生まれて、三十五歳で亡くなる。三十五歳ですよ。しかも、三十歳過ぎてからは脊椎カリエスという病気になって、結核菌が脊髄に入っちゃつて、全然動けないわけ。それで、布団の上に寝たきりになった五年間で俳句とか短歌をつくっている。

短歌も俳句もやった以外に、文章もいっぱい書いた。エッセイというか、随筆。これがすばらしい。寝たきりの人が書く文章なのに、ものすごく前向きで、元気になって、励ましてくれるようなくすばらしい文章で、私は、気持ちが弱っているときは、子規の文章を読む。今でも喝を入れてもらったような気がして元気になるのだけれど、岩波文庫に何冊か入っていますから、皆さんもぜひ読まれるといい。

しかし、正岡子規は生前、歌集を一冊も遺さなかった。死後、残つたお弟子が、遺された歌を集めて『正岡子規歌集』というのをつくりました。

「足たたば」なんてシリーズがあるんだけど、「足が立つようになったならば」という意味で、ようするに寝たきりだったんです。布団の上に寝たきりの三十二歳の若者が、悶々として歌をつくっている。

足たたば北インヂヤのヒマラヤのエヴェレストなる雪くはましを

というのがある。もし、足が立つようになったらば、「北インヂヤ」、北インドのヒマラヤの、エヴェレストの雪を食いたいなあ、という歌なんです。

これは何でもなく思うかもしれないけれども、この歌が出来たのは今から一二〇年前だから、短歌の中に外国の地名が入るなんていうのは、誰も考えなかったのです。

短歌というのは、自由自在に何でも好きなことを、好きなようにどしどし詠めばいいんだ、と言つたのは正岡子規なんです、簡単に言えばね。だから、外国の地名なんか三つも入っている。これで

もちゃんと歌だ、と言ったのが正岡子規という人で、今の我々から見れば何でもないことなんだけれども…、我々の書く歌にはこんなのはいつぱいある。でも、一二〇年前に、こういうのを正岡子規という人が突然始めたのだ、私たちの歌は正岡子規から始まる、ということを知っていてほしい。

どうです、足が立たないんだけれども、何か生き生きして楽しそうですね。もし足が立ったならば、歩けるようになったなら何をしたいか。桜の花を見たいとか、そういうのじゃない。インドに行つてヒマラヤの雪を食いたい。何か痛快ですね。

人皆の箱根伊香保と遊ぶ日を庵にこもりて蠅殺すわれは

これは有名な歌だけれども、人が皆、休日に箱根や伊香保に行くときに、私は行かないで…。行けないわけ。寝たきりだから。せいぜいやれることといつたら、飛んできた蠅を殺すことだけだ、と。蠅叩きで…。何か壮絶な感じもしますね。

やはり、短歌はその作者の年齢とか境遇といっ

たものを、下に敷いて読むとおもしろいです。こうなったのはまさに正岡子規の発明なんです。

美人問へば鸚鵡答へず鸚鵡問へば美人答へず春の日暮れぬ

何となくクスツというか…、いや、何の意味もないんだけれども、何かおかしい。美人と鸚鵡というのは何かそりが合わないんだね。美人が話しかけても鸚鵡はあつちのほうを向いている。鸚鵡が美人に話しかけると、今度は美人があちらのほうを向いている。両雄並び立たず、とても言いまじょうかね。そういうことをばたばたと書いて、最後に「春の日暮れぬ」と、これで歌になる。大体、「春の日暮れぬ」と下に置くと歌になるんです。(笑)これ、「春の日暮れぬ」をなくしてしまつたらば、歌にならない。普通の文章になつてしまふ。

「美人問へば鸚鵡答へず鸚鵡問へば美人答へず春の日暮れぬ」

どうだ、おもしろいだろう、と子規は言っているようです。寝たきりで、周りに友達とか弟子

がいつぱい来ていて、その場で歌会をしていて、「どうだ、おもしろいだろう」と。

だから、短歌をやるということは、何か楽しいんだよね、正岡子規にとつて。何より楽しいことなんだね。それをすぐ大切に思いますね。楽しく、生きる力を与えてくれるようなものであった、というところから、私たちの短歌が始まったということは、よく心しておくべきであつて、どうも現代は、短歌がだんだん楽しいものとは違つてきた感じがします。何か過剰に真面目になつてしまつて…。真面目はいんだけれども、真面目すぎるというのは、どうですかね。一冊の歌集を読んで、一回も笑わない、というのは、何か違うような気がするんですね

瓶にさす藤の花ぶさみじかければたたみの上にとどかざりけり

これは、最も有名な歌だからご存じですよ。これもよく考えると不思議で、1+1=2だと言っているような。「花瓶にさす藤の花が短けれ

ばつて、「藤の花が短いならどうしたんだ」「はい、届きませんでした」と。(笑) こんなの当たり前です。花ぶさが長ければ届くんだけれど、短くから届かない、と。だから、ほとんど内容がないわけ。内容がないんだけれど、何か気になる。この歌を聞いて、何か耳から離れないような、だから不思議なんだな。短歌つてね、内容がいつぱい詰まつているといいかというと、決してそうじゃなくて、ほとんど内容がないようなんだけれど、何か気になるのか、何か心に残るといのが、歌というもののありがたい形であつて、この歌はそれを典型的に見せているような感じがするんです。

これも言葉書きが付いていてわかるんだけれど、寝たきりの人の視線なんです。これは死ぬ前の年くらいの歌だから、ほとんど布団から起き上がれない、それくらいの自由度しかなくなつたころの歌なんです。パッと横を見たら、机の上には藤の花ぶさが差してあつて、それがもう少しで畳の上に触るんだけれども、まだ届いていないなあ、というのを見つけた、という歌なんです。健

康な私たちは、この隙間というのはなかなか発見できない。寝ている人間だけが、横になって初めてそこに隙間があるというのを見つけたわけで、健常の我々だと上からの視線になってしまいうから、藤の花ぶさが畳に触っているのか、畳から離れているのか、見つけることは意外とできない。やっぱり寝ている人の視線が、我々に何かを訴えているんでしょうねえ。

こんな歌を正岡子規はいっぱいつくって、さらさらと書き記して、近代短歌の始まりを成したわけです。

次は、斎藤茂吉ですけども、斎藤茂吉という人は、近代短歌一〇〇年の中で、崇拜する人が次から次へ現れて、神格化してしまって、神に祀られてしまっているようなんですけども、わたくしの読み方は、ちよつと違う。

茂吉は、すごくおもしろい人でして、茂吉の短歌はすごく笑えるんです。文章が本当にうまいんですよ。普通の文章が。茂吉は散文家としても、

日本で第一級の仕事をしたいと思えますね。随筆というか、エッセイというか、それは破格のおもしろい文章がいっぱいある。これも岩波文庫に『斎藤茂吉随筆集』というのが入っているから、どうぞ読んでください。

一つだけ紹介しますね。有名な文で知っている人もいると思うんですけどね、『接吻』という題名の有名な随筆があるんですよ。これは、茂吉が三十代の後半でヨーロッパに留学する。そしてウィーンに行くんです。そこでいっぱい随筆を書くんですけども、その中の一篇で、こういうことを書いています。

ウィーンのことを昔は「ウィンナ」って言った。「ウィンナのギルセル街は、ドナウ運河の近く、フランツ・ヨゼフ停車場の側からおこって、南方に向って帯のように通っている大街である。そこには質素な装いをした寂しい女が男を待っているかいたりした」

「西暦一九二二年のある夏の夕べに、僕はささやかなレストランで一人夕食を済ませた。そして、

いつしか一人でギルセル街を歩いていた」

目に浮かぶようでしょう？ 一人の留學生が歩いているんです。夕方一人で一日の仕事を終って歩いている。何か茂吉と一緒に歩いているような気持ちになります。

「太陽が落ちてしまっても夕映えがある。残光がある。余光がある。薄明がある。ドイツ語には何かがある：」

「夕べの何とかがあつて、ゲートルでもニーチェでも、実に気持ちよく使っている。これを日本語に移す場合に、大和言葉などに引用はないだろうか。そして夕明かり、薄明り、名残の光、消え残る光など、いろいろ頭の中で並べたこともあつた。ヨーロッパの夏の夕べの余光はいつまでも残っていた」

読んでいても実に気持ちが良くなるくらいの名文です。

「その歩道に一人の男と一人の女が接吻をしていた」

「男はひよろながく痩せておつて、髪はぼうぼう

うとしている。身には実にひどい服を纏い、うつむき加減になって、右の手を女の左の肩のところから、それから左手は女の腰の辺をしつかり押さえて立っている。口髭が少し伸びて、青ざめた顔をしているのが少し見える。女は伸び上がって両手を男の首のところに掛けて、そして接吻している」

「僕は少し行き過ぎてから、再びそれを顧みた。男女は身じろぎもせず突っ立っている。ややつて再び顧みた」

「僕はやや不安になってきたけれども、これは気を落ちつけなければならぬと思った。少し後戻りして、マロニエの木陰に身を寄せて、立ってその接吻を見ていた。その接吻は実にいつまでも続いた。一時間余りも経ったころ：」

まず接吻を一時間するというのはびっくりするね。日本人はできないでしょう。もっと驚くのは、その一時間の接吻を一時間見ていた人間がいるというのには：（笑）これはねえ：。つまり斎藤茂吉というのは、こういう癖が：。これは嘘だとは思

えないんだなあ。こういうことがいろいろ話の中に出てくるんですよ。歌を詠みだすときに、似たようなことが……。何か精神が集中してしまうと、どんどん、どんどん深入りして行ってしまっ
て、いわゆるこれは覗きなんだけれど、(笑) 実に堂々と覗く。そこに何とも言えないおかしさというか、ユーモアがあって、この文章を読んで、誰もが爆笑をするんだよね。爆笑をするんだけど、何か奥が深いというか、不思議なものを見せられたような感じがするのです。こういう文章をいっぱい書いた人なんですよ。

次の歌をご覧ください。

『つきかげ』という歌集があって、これは茂吉の最後の歌集で、ちょうど私ぐらいの年頃の時です。茂吉はもう早く七十で亡くなるから、最後の数年の歌集なのですけれども、何か今までの歌集とは違うんだよね。何か、とろんとしてしまっ
て。でもそのとろんとしたのに実に味わいがあるんです。

銭湯にわれの来るとき浴槽にて陰部をあ
らふ人は善からず

何も、そこまで言わなくてもいいだろう、という感じ。(笑) 銭湯に来たときに、先に入っているお客がいて、風呂に入りながら、タオルで自分の陰部をゴシゴシ洗っているんだね。(笑) それで非常に不愉快になった、という歌なんです。

名歌とか秀歌とか、そういう歌ではありませんけれども、何か独特のおもしろさがあって、一回読むと、吹き出してしまう。言っている内容はすぐく下らないんだけど、正調というか、歌の調べがものすごく立派なんです。歌の形というか、調べが。でも、入っている中身がバカバカしいものもあるんです。その落差がすぐおもしろいですね。不思議な人です。

秋たちし畳の上に居る蠅をわれに近づくと
まへに殺せり

これも何か変な歌でしょ？どうして、そこにいる蠅が私に近づいてくるのか、どうしてわかるの

でしょうかねえ。理屈が立たないわけね。蠅が私の前に来る前に殺してしまえ、という微妙な思い込みみたいなものが、斎藤茂吉はすごくあった人で、その歌の一つの例だと思えましたね。

濃厚の関係にある面相に熱海の道をつれ
だち歩む

これは、熱海に行ったときに、向こうから男女が歩いて来たんです。見るからに濃厚の関係にある。(笑)

茂吉という人はすごく嫉妬深い人で、いろいろな人が書いているけれども、実際に街中を歩いていても、向こうから、いわゆる昔でいうアベックが来ると、「いい気になるなよ」とかって……。(笑) ぼそつと言うらしい。そういう子供じみた嫉妬感みたいなものがあって、それが歌の中に表わされてくるものがある、茂吉ならではの歌です。

嫉妬心などは誰の心の中にもあるものだけれども、それは恥ずべきものであるというのを我々は知っているから、隠しますよね。それを歌に茂吉

は出しますね。

でも「濃厚の関係にある」というのはおもしろいねえ。熱海だから貫一・お宮なんだね。(笑) 『金色夜叉』の。それをもちろん連想している。貫一・お宮を気取りやがって、と。(笑)

日本橋をひとり渡れどおのがじしほかの
人らもわたりて居るも

そりや日本橋だから、いろんな人が渡っていますよね。(笑) 日本橋を私が渡っていたら、ほかの人も渡っていた、という歌なんだから。無内容性という点では、さっきの正岡子規の「藤の花ぶさ」と似ていますよ。でも、これは「おのがじし」というのがものすごくうまい。「おのがじし」という言葉、語意は辞書を引けば出てくるけど、こういうふうにするのか、と。

をさなごがやうやく物をいふときに言の
吉言をおのづから言ふ

いい歌ですね。「言の吉言」って、なかなか言え

ない。孫がしゃべりだしたころの歌で、幼子がよ
うやくものをしゃべりだしたときに、必ず好いこ
とを言う、と。皆さんも覚えがあるんじゃないで
すか？

私にも孫が一人いて、今三つになるんだけど、
この前、みんなで会食したことがあって、レスト
ランで食事をしていたら、その三歳の孫が突然イ
スの上に飛び上がって、一人ずつ指差すのね。「パ
パ、ママ、じじ、おばさんの何とかちゃん、おじ
さんの何とかちゃん」って指差していつて、「み
んな見えるねえ」と言ったんですよ。それが何
かおかしくて、皆、どつと笑ったんだけど、「み
んな見えるねえ」というのは、考えてみれば、あ
れが「言の吉言」なんです。大人は「みんな見
えるねえ」って絶対言わないでしょ。本当に三つ
ぐらいの子供だけが言う言葉で、神様の言葉みた
いなものです。すごく好い言葉でした。

では、現代の短歌を紹介しましょう。花山多佳
子さんという人がいて、私と同じ齢で、親しくし

ているんです。その花山さんに、『木香薔薇』と
いう歌集がある。十年ぐらい前のものです。

エレベーターとまちがへわが家の呼びり
ンを押す人がゐる年に二、三度

これは花山さんの住宅状況を知らないといわから
ないでしょうけれど、マンションに住んでいらっ
しゃるのかな。あまり高くないマンションらしい
ですね。エレベーターがないんだって。そして花
山さんは一階に住んでいる。だから、酔っ払いか
何かが、マンションだからエレベーターがあると
思って、エレベーターのボタンだと思って、自分
の家のピンポンを押す人が必ず年に二、三人はい
る、という歌です。あり得ることですね。

次の歌は、これは名作ですよ。

大根を探しにゆけば大根は夜の電柱に立
てかけてあり

これは買い物物の歌でしょ。大根を買って来た、
スーパーで。自転車か何かに積んできたのかな。

それで、大根を落としてきたというんですよ。花
山さんって、そういうところがある人だから、(笑)
大根を一本落としたのを、ね。

皆さんにお聞きしたいのだけれども、そういう
ときはどうしますか？大根を落として来たなら戻
る？諦める？花山さんは探しに行ったんだね。「大
根を探しにゆけば」というのはそういうことで、
元来た道を、どこかに大根が落ちていないかな、
と違ってスーパーの方まで戻ってきたわけです
よ。そうしたら、その大根が、何と電柱に立て掛
けてあった。後から来た人が道の真ん中に落ちて
いる大根を見つけて、大根を落としていったのだ
から探しに来るかも知れない、と思つて、ここに
置いたら目立つだろう、と電柱に。そういうドラ
マが見えるよね。なかなか良いドラマじゃないで
すか。

短歌をつくりながら勉強になるのは、大根を落
としたことが省略されているところ。す
いきなり「大根を 探しにゆけば」でいいんだね。
でも、この省略がなかなかできないんですよ。大

体全部しゃべっちゃうから、大抵の人は。大根を
落として来たので、というところから歌をつくり
だす。それが要らないのだ、ということがこの歌
でよくわかります。

戻り来て畳に倒れ込むわれに「そのまま」
と言ひ、むすめ写生す (笑)

花山さんの娘さんは美大生、絵描きの卵なの。
お母さんが帰って来て倒れ込んでしまった。疲れ
てそのまま玄関にパタッと。普通はそういうとき
は娘が来て「お母さん、大丈夫」とか、何とか言
うじゃないですか。そうじゃない。「そのまま」
と(笑)、スケッチブックを取り出して絵を描いた。
(笑) 花山さんもじつとしていたんだろうね、描
き終るまでね。(笑) 不思議な家庭だね。

つきつきに「おじやましました」と言ふ
声の聞こえて息子もゐなくなりたり (笑)

これは高校生の息子ですね。これ、私はまざま
ざと情景が浮かぶのです。高校生ぐらいの男の子

の付き合い方というと、友達が家の中に入ってきて、親と顔も見せずに息子の部屋に行つてごちゃごちゃやって、帰るときは、顔は合わせないけれど、一応声だけ掛けて帰るわけね。「おじやましました」「おじやましました」と。皆帰つたな、と思つて行つてみたら、息子もいなくなつていたと。(笑) 息子は「行つて来ます」とか言わないんだよね。黙つて皆と一緒にいなくなる。覚えがあるでしょ。皆さんのところも。高校生ぐらいですよ。もう少し大きくなると違つてくるんだけれど。そんな感じで、花山さんの歌というのは、家庭劇、家庭のドラマで、特に二人の子供たちをこつやつて歌にするんだけれども、非常におもしろくて、女性には珍しく、笑いがある。いいことだと思います。

島田修三さんの歌に行きます『帰去来の声』に『新明解国語辞典』のもの深さ「摩羅」引きたまへ感じ入るべし

『新明解国語辞典』は三省堂の国語辞典で、普

通の辞書と一味違つていて、書いてある説明が実におもしろいんだね。読み物として読めるの。その中で「摩羅」という言葉を引いてみる、という。これは、そもそも仏教語で、「摩羅」というのを引いてみると、実に感心するから、あなた、引いてごらんさいよ、という歌です。

私はこの歌を読んで、思わずその『新明解国語辞典』を引いてみて、私も実に感じ入りました。実に良いことを書いてあるんだよね。ここでしゃべつてもいいんだけれども、それではお楽しみがなくなるので、帰ってから引いてみてください。

あかあかとカンナ咲きたる庭の見えステ
テフは見えシユーズ寄り添ふ (笑)

洗濯物の歌ですね。ステテフが下がつていて、そこにシユミズが下がつていて、風が吹いて来たから寄り添つているの。夫婦愛の歌だよ。でも、どこかエッチなんだな。(笑)

こういうのが島田さんの歌で、非常に痛快な文明批評とおかしさみたいなのがあつて。彼は万葉

学者なんだけれども、珍しいことだよ。普通は万葉学者なんて、すぐまじめな歌になつてしまふんだけれど、そうじゃなくて、すごく楽しいパワフルな歌をいっぱいつくつていて、おもしろい歌人だと思います。

最後に、花山周子。この周子さんは、前の、多佳子さんのお嬢さんです。さつきの、写生をした人が短歌もつくる。なかなかの才能があつて、今は子育てが忙しいんだけれども、花山多佳子さんもおばあちゃんになって、孫が生まれて…。

これは、花山周子さんが大学生ごろの歌です。『屋上の人 屋上の鳥』にこういうのがある。

この頃思ひ出づるは高校の職業適性検査の結果「運搬業」 (笑)

これおかしいでしょう？職業適性検査というのがあるんです。私も高校教師だったからやらせるんだけれど、結構生徒はまじめにやつて気にする。こういう仕事があなたに向いています、なんて本当かどうかわからないのが出てくるんだけど、そ

れで花山周子が高校のときに受けたときに、何が出てきたかという「運搬業」だ。(笑) 要するに、あなたは頭じゃなくて体を動かさなさい、と。肉体労働だよ。

このごろ思ひ出す。私は美大に入ったんだけれども、仕事なんか何もないから。美術大学を卒業しても、まず大抵の子は。何になろうかと思つていたら、あゝ、高校時代に「運搬業」と出たな、と思ひ出したと。何か、おかしい歌で、痛快ですよ。こういう若者の歌だとわかるな。

富士山と一緒に登つてくれる人と結婚しよう決めて下山す

単純でいいね。どういう人が理想の人ですか？はい、富士山と一緒に登つてくれる人です。(笑) 単純明快。

今の若者の歌は、どうしても内向しちゃうんで、自分の自意識だけの歌になつてしまつて、他人が出てこないんだけれど、これなんか非常に痛快に出てくるんです。

ひったりと手をあて窓に貼りついて守宮のごとく君を待つのだ
ストーカーだね。(笑) 相聞歌なんでしょうけれどね。君が帰って来るまで、君のアパートで待っている。窓に貼りついて、君が帰って来るのを待っている。

蒲団より片手を出して苦しみを表現しておれば母に踏まれっ (笑)

これ皆さん一番笑ったね。

布団から片手を出して、苦しみを表現していたら、そうしたらお母さんが来て、ぎゅっと踏んだ。(笑)「いつまで寝てんの。早く起きなさい」って、こんな感じで、すごく楽しい親子関係ですね。今日、私の言いたいことは、短歌をつくるというのに、楽しさ、おもしろさ、生き生きとした気持ち、生きる力が強まるような気持ち、そういうのがすごく大事だということです。

戦後の短歌、ここ五〇年の短歌の風景を読むと、そういうのが、少し足りないような気がする。

ちよつと真面目路線に走り過ぎてるような感じがします。正岡子規なんて、一一〇年前だけれど、あっちの歌のほうが、私が読んでいておもしろいもの。
そんなわけで、どんどん笑いながら力を高めていくことが、西行法師も喜ぶんじゃないかな、と思っております。(拍手)

プロフィール

こいけ ひかる

昭和二十二年、宮城県柴田町生れ。

現代歌人協会賞、寺山修司短歌賞受賞。

「読売歌壇」選者。仙台文学館館長。

。実印の象牙の文目くもる日にうつつなるべき

こゑほととぎす

第五十三回 平泉芭蕉祭全国俳句大会 記念講演

「翼を仰ぐ」

講師 正木 ゆう子 先生

ご紹介に預かりました正木ゆう子です。よろしくお願い致します。

本日は、このような名刺中の名刺にお招きいただき、大変光栄です。平泉へ来るのは今回で確か四回目で、最後に来たのは二十数年前。BSテレビで、毛越寺からの句会の生中継をやったことがあります。その時に来たのが多分最後です。

その時はまだ、私の師・能村登四郎先生がお元気な頃で、先生を中心に、中原道夫さんと一緒に、毛越寺から句会を中継しました。蓮の花が咲いていて、八月だったと思います。

今日は「翼を仰ぐ」というお話をさせていたのですが、その前に、せっかくの芭蕉祭ですので、芭蕉のことに触れて、それから渡り鳥の話

に行きたいと思えます。

ちょうど二カ月前の五月二十九日に、私は鳴子におりました。その前日に南相馬の小学校で俳句の授業をしました。南相馬に小高区というところがあります。そこに小学校が四校あるんですが、今、四校合同で仮設校舎に避難しています。そこに、俳句の授業に行っておりまして、その授業を終えて翌日に、仙台それから松島、石巻と北上し、鳴子に一泊して尾花沢へ抜けました。

奥の細道では、芭蕉が石巻からここ平泉へ来て、平泉から鳴子、そして山刀伐峠を越えて尾花沢へ。そこから立石寺へ行き、またもどってきて、大石田から船に乗って最上川を下っています。でも、実際には大石田から直接羽黒山へ行ったのではなくて、大石田からいったん馬に乗って新庄まで行き、二泊してから本合海もとあいかいから船で下って行きます。

新庄で二泊したのは、渋谷風流と言う人の家です。旧暦六月一日と二日ですので、平泉から二週

間ちよつと経った後ですね。実は私は、その渋谷家にその当時からあった仏様、阿弥陀三尊像ですが、その仏様に見えたことがあります。と言いますのは、私は現在「紫薇」という同人誌に所属しているんですけども、その代表の渋谷道さんが、渋谷家の直系の子孫なんです。新庄の渋谷家は紅花を商う大きな商家だったそうです。しかし明治元年に戊辰戦争で家を焼かれて、新庄を離れることになった。その時に道さんの祖父様だったと思



いますが、体一つに阿弥陀三尊を背負って引越していったそうです。渋谷家は、その後京都に住みついて、その阿弥陀三尊を、今は大阪で渋谷道さんが守っておられるんですね。

「紫薇」というのは連句の同人誌ですので、そのメンバーで道さんのお宅で連句を巻いたことがありまして、その時にお参りさせて頂いたんですが、一個人の家にあるにはとても大きな仏様で、像高が一メートル以上もあるんですね。ちよつとしたお寺にあっても全然おかしくないくらい、立派な仏様でした。それが一般家庭のなかにあるだけに、そしてまた、渋谷道さんが、本当に朝夕に話しかけてお参りをしていらっしゃる、現役の、美術館などにあるようなのではない仏様だったので、特に、芭蕉が見えた仏様のもとで連句を巻くというのがなんとも贅沢に思われて、まるで、時を越えて芭蕉と同じ空気を吸っているような、有難い気分でありました。

その仏像は京都の仏師が作って、新庄まで運ばれたものようです。新庄に接引寺しょういんじというお寺が

あるそうですけれど、接引寺の脇侍の像は、渋谷風流が寄進したもので、それが今、道さんのお宅にある仏様と酷似しているそうです。渋谷さんは高名な俳人でありまして、一昨年には蛇笏賞もお受けになられたので、皆さんご存じだと思いますけれども、渋谷道さんが渋谷風流の直系であることは、もしかしたらご存じではないかもしれませんが。渋谷さんはとても謙虚な方で、謙虚さゆえに、ご自分と渋谷風流の関係のことはもちろん、あまりお話しになってないし、お書きにもなっていないので、わたくし、妹分ですのでここでちよつとみなさんにお話ししておきたいと思います。

渋谷家では芭蕉の直筆を家宝にしていたそうですけれども、戊辰戦争でそれも焼けてしまつて、なにしろ奥の細道には新庄のことが書いてありませんから、芭蕉が新庄を訪れたということは言い伝えるのみだったそうです。それが、昭和十八年に『曾良随行日記』が世に出まして、公に認められる事実となりました。曾良の『随行日記』を世

に出したのは、山本安三郎という人なんですけれども、実は、この方は私の先生の能村登四郎の母方の伯父にあたる方なんです。この伯父さんの手ほどきで能村登四郎は俳句を始めていますので、なんだかちよつと私も関係があるような気がしております。新庄の渋谷家では芭蕉を囲んで、歌仙が一巻と三つ物が二巻が巻かれています。三つ物というは普通の歌仙のような長いものではなく、発句・脇句・第三句の、三句のみの連句を言うんですけれども、その二巻の三つ物の発句はそれぞれ芭蕉が詠んでいて、みなさん周知のことかもしませんが、私もこの句が大好きなので、ここでも読ませて頂きます。

水の奥水室尋る柳哉

それともう一句は

風の香も南に近し最上川

という二つの、三つ物の発句です。水室の句は、六月一日に詠まれたもので、その日は水室の節会という行事に当たっていたんですね。水室の節会と言うのは宮中の行事で、水を食べるようなこと

らしいです。とてもひんやりした、いい句ですよね。それに対して、六月二日に詠まれた二句目は、薫風を思わせるようなおらかな句で、全然趣の違う二つの発句を詠んでいます。この二巻の三つ物のうち、「水の奥氷室尋る柳哉」の句には「風流亭」という前書きがついておりまして、二つ目の「風の香の」の句には「盛信亭」という前書きがついています。盛信というのは風流のお兄さんなんです。芭蕉を泊めたのは風流なんですけども、風流は、お兄さんの本家に芭蕉をお連れしたというわけです。道さん宅にある仏像は、この盛信亭、本家の方にあつたものです。新庄のくだりが奥の細道に書かれていたら、どんなふうに書かれたらうと、興味深いのですが、もともと新庄は予定になかつたとのことで、尾花沢での鈴木清風宅での句座に渋谷風流も同席していたことから、その場で決まつたと考えられます。有名な、鈴木清風宅での歌仙の

涼しさを我宿にしてねまる也

という尾花沢の句の歌仙の中に、渋谷風流の付句

も入っております。ところが、風流は所用があつて中座したという事になっているんです。これは、芭蕉が自分の家に来てくれるという事が急に決まつたので、その準備のために急いで新庄へ帰つたと受け取れるのではないかと思われれます。そうでなければ、芭蕉どの句座を中座するなどということは考えられないことですから、おそらくそうじゃないかと、道さんはおっしゃっていました。道さんの推測ですけれども、そんなことだつたんじゃないでしょうか。

「水の奥」の「水」というのは、柳の清水というものだと言われているんですけども、新庄のあるお寺には、窟の中に湧き清水があつたということ、道さんのおばあ様が言っておられた。だから、この句は、一般的に言われている道にある柳の清水ではなく、窟の中の清水のことかもしれないという想像を、道さんと話したことがあります。水の奥に氷室があるなんて、なんだか窟っぽいですね。いずれにしてもこの泉が湧いていたから、触れてみたいなと思います。でもこの清水は、

ある時歌人が来て歌を詠んだら、その歌がまづかつたので濁つたという言い伝えがあるそうなので、ちょっとおそろしいんですが。このように、その時の新庄のことを想像していると、まるでタイムスリップしてみたみたいにくわくします。渋谷亭は、今は新庄の駅のわりあい繁華街にある銀行や、ホテルになっているそうです。そこには芭蕉来訪のことを記した「屋敷跡」の石柱が立っています。渋谷道さんの本籍は今もそこにあるんだそうです。

ということ、ちょっと芭蕉に触れましたので、あとは「翼を仰ぐ」にいきたいと思います。今日のご依頼を頂いた時に、私はこの中尊寺で、何を話せばいいんだろうってとても悩んだんですけど、ああそうだ、こういう時こそ、自分が一番好きなこと、この世で一番素晴らしいと思つて、何を話したらいいんだと思つて。それは私にとつては、鷹の渡りを見ることなんです。それで演題を「翼を仰ぐ」としました。渡り鳥の話です。

鷹の渡りも渡り鳥の一種ですけれども、「歳時記」を見ますと、渡り鳥に関する季語はたくさん載っています。単に「渡り鳥」と言えば秋の季語で、主に北の方から日本へ渡ってくることを言います。秋の渡り鳥の季語を見てみますと、まず「渡り鳥」ですね。俳句の講演ですので鳥の話ばかりではなくて俳句も織り交ぜてと思つて書き取つて来ました。渡り鳥で有名な句、いっぱいありますけれど、

鳥渡るこきこきと缶切れば	秋元不死男
木曾川の今こそ光れ渡り鳥	高浜 虚子
はらわたの熱きを恃み鳥渡る	宮坂 静生
街あれば高き塔あり鳥渡る	有馬 明人
天山のこと聞かせてよ渡り鳥	原田 喬
渡り鳥みるみるわれの小さくなり	上田五千石

こんな句があつて、渡り鳥といえは秋の季語で、北から日本へ渡ってくることをいうことが多いです。あとは、「小鳥来る」。「小鳥来る」というのも、

秋の場合は北の方から来る鳥をいいます。さらに、「燕帰る」というのも秋の季語です。

去ぬ燕ならん幾度も水に触る 細見 綾子
燕の帰りて淋し蔵のあひ 正岡 子規
蔵の間から見えるところに、燕がもういない、等といったこうした句があります。また、「鶴来る」という季語もあります。

鶴の来るために大空あけて待つ 後藤比奈夫
鶴来るや新薫の香の納屋に満ち 大岳水一路

それから雁ですね。雁の場合はなぜか「渡る」と言うんですね。「来る」ではないんです。「雁渡る」というのも秋の季語で、

みな大き袋を負へり雁渡る 西東 三鬼
ともしびのひとつは我が家雁わたる

湖もこの辺にして雁渡る 橋本多佳子
高浜 虚子
これらが秋の渡り鳥の季語です。

今度は春。渡り鳥っていうのは春と秋に移動しますので、今度は春の季語がどんなのがあるかというところ、「燕来る」それから、「引鶴」「鶴が引く」これは帰っていくことですね。

引鶴の天地を引ききてゆきにけり 平井 照敏
引鶴の骨身をたたく羽搏ちかな 山上樹実雄
それから、春は白鳥も帰るんですね。「白鳥帰る」あるいは「雁帰る」。雁がないというのは詩的な響きがあるので、「雁帰る」の例句が沢山あるんです。

美しき帰雁の空も束の間に 星野 立子
いいですね。
かりがねの帰りつくして闇夜かな

胸の上に雁ゆきし空残りけり 村上 鬼城
風呂の戸を開けて雁見る名残りかな 石田 破郷

燕村の弟子ですね。 几 董

これらは有名な句ばかりで、「歳時記」に載って

います。それから

きのふ去にけふ去に雁のなき夜哉

雁ゆくや波の下にも幾山河 蕪 村
いくつも山河がある。十時海彦という方は、私が

「沖」という俳誌に所属した四十年前に初めてお会いしました。この俳誌の三周年の時でしたか、初めて俳句の集まりに出た時に、一番若そうな人に声をかけたのが、この方でした。私より三歳ほど上で、この方は本名を、玉井日出夫さんと言って、この前の前の文化庁長官なんです。若い時の句ですが、とてもいい句ですよ。それから「雁帰る」でもう一句紹介しますと、

誰よりも水際にいて雁送る 岡崎 桂子
これなんかは、わかりますね。もう、一步でも長く雁を見送ろうとして、誰よりも水際に行く、水際にいて雁を送る。それから「鳥帰る」も春の季語。

鳥帰る無辺の光追ひながら 佐藤 鬼房
「鳥帰る」の関連で「鳥雲に入る」も俳句ではよ

く作りますね。鳥が帰る時に雲に入って見えなくなっていくこと。

鳥雲に入るここよりは日本海 福永 耕二
北へ帰っていくので日本海なんですね。

少年の見違はるは少女鳥雲に 中村草田男
鳥雲に入るおほかたは常の景 原 裕
あるいは

豪流の渦となりけり鳥雲に 廣瀬 直人
これら、秋と春の季語を挙げてみました。「渡る」とか「帰る」とか、「来る」とか「引く」という言葉が春にも秋にも入っていて、大変紛らわしいでしょう。どの季節なのか、よく考えないとわからないんですね。

でも、私はある時気が付きました。結局、秋には、北から日本へ渡ってくる、あるいは日本から南へ渡る、つまり、秋には南へ動く。春には日本から北へ帰る、あるいは南から日本へ渡ってくる。だから、春の動きはすべて北に行く。そんな風に動きとして認識するとわかりますよ。とにかく秋には南へ行つて、春には北へ行くのがこの北半

球あたりでの、渡り鳥の動きなんです。

どうして鳥はわざわざそんなことをするのか、そのことを考えてみました。

地球儀を思い浮かべるとそれがわかるんですね。先程、南相馬の小学校の授業の話をしましたけど、子供たちに俳句を教える時にまず私が言うのは、「俳句には季語があつて季節を詠みます」ということです。「じゃあ季節はどうして変化が起きるんでしょう」と言いますと、変化する理由というのはたつた一つしかなくて、地球が太陽に対して、直立しないで傾いているからです。太陽があつて地球がある。地球がまっすぐに立っていたら四季の変化は起こらない。これが、実際には二十一度半傾いているから、一方にいるときには北半球に光がよくあたり、他方にいるときには南半球に光が当たるんですね。

この繊細な四季の変化というのは、地球が傾いているというたつた一つの理由で起こっている。いつも子どもたちに言うのは、「今日は太陽がほ

ら遠いでしょ、とっても遠いね。でも、私たちは半年後にはあの向こう側の倍のところにいるんだよ」って。「そんな風な旅をしながら地球の上でこれだけの変化が起きているっていうこと、それをまず頭において俳句を作りなさい」って、いつも言うんです。そうすると、子どもたちは気が楽になって、けっこう大雑把な俳句を作ってくれて、おもしろいんですね。

話をまとめますと、地球の環境って、太陽の日の当たり方によつて変わっているわけですよ。つまり、鳥たちは、常に太陽と同じ位置関係にしようとして、それで移動するんじゃないかって、私は思うんです。そう考えると、なんか納得するでしょう。私はそう思います。

鳥たちは渡るときに、あんまりバタバタバタバ羽ばたかない。風が吹くんですね。風に運ばれて渡る。特に鷹の渡りは羽ばたかないです。鳥たちはできるだけ同じ環境にしようとして折しも吹く風に乗って渡るのはないかと思うんです。鳥

たちからしてみたら、私たち人間こそ、定住して夏は暑い、冬は寒いって言つて、ストーブ焚いたり、クーラー入れたりして、よつぽど大変に見えるかもしれないですね。鳥たちは、移動は大変かもしれないけれども、荷物もないし、風に乗って移動するので、バタバタしないで、とっても美しい。私はあんなに美しいものはこの世にないと思います。私が死ぬ時が来たら、あの光景を思い浮かべながら死にたいというのが夢です。常にそう思っています。それほど美しい光景です。こんな風に考えると、地球の全体が見えて来るっていうか、私たちはそうか、こんなにも大きな世界の中に生きてるんだなと感ぜられて、とても幸せなんですね。

鷹の渡りを見たことがある方いらっしゃいますか。昨日お会いした方が、北上川の上で鷹らしいものを見て、句を詠んだと言っていました。このあたりは、鷹が渡りそうですね。鷹にもいろんな種類があつて、もちろん渡らない、渡りをしな

い鷹もいますが、ある種の鷹は春と秋に渡ります。私が見に行くのは主にサンバとハチクマの渡り。それも秋の渡りです。はじめて行つたのは一九九九年の秋でした。福岡県の遠賀郡の高台にある城跡に登つて見たんですが、この時は一羽も見ることが出来ませんでした。数羽の鷹が渡つたらしいんですけど、この時は山の裏側を通つたらしい。ここでは英彦山ひこさんの方から渡ってくる鷹を待つていたんですね。英彦山というのは、

碓すして山やまほととぎすすほしいま、杉田 久女という久女の句の英彦山です。そこから渡ってくる鷹を待つていました。このときはハチクマです。広島辺りから来て、福岡、長崎を通過して、五島列島に渡つていく鷹を待つていたということですね。この時に見ることが出来なかつたので、それから火がついて、翌年からは佐世保の烏帽子岳というところに行くようになりました。ここでは、アカハラダカつていうのとハチクマを見ることが出来ます。ハチクマは中国地方から来て佐世保を通過して、五島列島に行くんですね。アカハラダカ

は、朝鮮半島から対馬を通って長崎を通って南へ下っていく。佐世保は、その二つの鷹の動きの交差するところなんです。結局はみんな同じように南に行くんですけれど、アカハラダカは小さいので、バタバタ羽ばたいたことがあるんです。だから、中継地点の多いところを通るのかなと想像しています。この時に案内してくれた人が、今日はハゼ釣りを止めて鷹の渡りを見に行くって言っていました。时期的にはハゼ釣りの頃と同じ、秋のお彼岸です。佐世保の烏帽子岳というところは、日本中から鷹の渡りの観察に人が来ます。それでも、そんなに常に見られるわけではないんです。

ここ烏帽子岳へは七、八年通いました。でもなかなか渡りのピークには巡り合うことが出来なくて、多くて一日に千羽くらいでした。ここは多い時には二万羽、鷹が渡るといようなすごいところなんです。とてもそのタイミングを計るのが難しく、私は九月に入ると、ネット上に出る観察している人の報告を、毎日チェックします。それでも、なかなか見られないんですよ。でも、鷹の

渡りっていうのは見られなくてもいいんです。ちょうど秋のお彼岸の中日の前後なので、鷹が渡らなくても大抵素晴らしい日なんです。ですので、一羽でも見られればもう大喜びでというところですよ。皆さん、この辺でもきつと誰か観察していると思いますので、一度行かれて下さい。

今は、数年前から長野県の白樺峠、乗鞍岳のちよつと下に行くようにしています。時期になると「信州ワシタカ類渡り調査班」のホームページを毎日調べて、天気予報もつぶさに調べて、渡りそうな日に行きます。高速道路でも五時間かかる、とっても大変な場所です。乗鞍岳のつべんがもう見えるくらいのもので、電車やバスだけでは行けない所です。崖崩れがあったりもするのですが、行ってみるとやっぱり大勢人がいます。

私はここで二年くらい前に三千四百羽くらいの渡りを見ました。三千四百羽っていつても、一日かけてじゃないんですよ。ピークっていうのはたいてい十一時〜二時頃なので、三時間くらいで渡

る。そうするともう、鷹の切れ目がなくらいなんです。

鷹の渡りでなぜ鷹が羽ばたかないかっていうと、山に風があたってできる上昇気流に乗って、旋回をして上まで行って、気流に乗って飛ぶからです。上がる時も流れるときも羽ばたかない。それが本当に美しい。伊良湖辺りを別にすれば白樺峠は恐らく一番有名な所だと思います。大勢の人たちが、ものすごく高そうなカメラを構えて待っています。

私も、それこそ朝からずっと待って、双眼鏡で見ます。すぐ近くに来れば肉眼でも見えますけれど、双眼鏡で見てもごま粒ほどです。双眼鏡の倍率は四倍を使います。そりゃもちろん八倍とか十倍がいいんですけど、そうすると大空の中で捉えきれない。四倍くらいだと、私でも捉えられる。それに軽いです。一日中構えているわけですから、とてもじゃないけど、重いのは持てない。こういうのを持っていかないと見られません。その日の

数は正確には三千三百八十五羽でした。

この数字がわかるのは、「信州ワシタカ類渡り調査研究グループ」が、八月の終わりから、二カ月くらい毎日、朝から晩まで観察しているからなんです。ピークの日には毎年ほぼ二十三日、お彼岸の中日の前後一週間におさまる。それもまたすごいですよね。気温で渡るんじゃないんですよ。やっぱり太陽光とかそういう問題で渡っていくんですね。

どうして白樺峠なのかっていうと、あの辺は北アルプス、中央アルプス、南アルプスが屏風のように、壁になっていますよね。だから、鳥たちはせき止められて、渡れるところがほんのちよつとしかないわけです。もちろん他にもあるかもしれないけれど、人間が観察できるような状況では、恐らくあの屏風のような中では白樺峠なんですよ。鷹っていうのは食物連鎖の頂点にあつて、普段はともテリトリーが広くて、群れない鳥なんです。ですから、鷹の渡りのように何千羽が

一緒に渡って行くのは、偶然ということのようなんです。白鳥のように誘い合わせて渡るんじゃない、一羽一羽がその日しか渡れないから渡っているんです。同じ所を。そこしか渡れないから、この日しかないから渡っているんですね。そういうのが何とも悲壮な感じで、とてもかつこいいんですよね。

この渡りを衛星で追跡した人たちがいます。『渡り鳥の衛星追跡』という本なのですが、どんなふうに、何日にどこに行った、ということが書いてある。鷹の渡りは、観察され始めて、まだ日が経っていません。もちろん大昔から農業や漁業の人たちは、目安にしていたのでしようけれど、こんな風に観察されるようになったのは、まだほんの最近のことです。三十年も経っていない。この渡り鳥の衛星追跡を初めてやったのは二〇〇二年でしたか。それくらい最近のことなんです。樋口広芳というひとの『鳥たちの旅 渡り鳥の衛星追跡』（NHKブックス）という本の中から、「あずみ」

と名をつけられたハチクマの鷹の、二〇〇三年の秋の渡りの道筋を、読みあげてみますので、思い描きながら聞いて下さいね。

ハチクマのあずみは、九月十九日に安曇野を出発しました。そして岐阜（白樺峠から岐阜へ抜けるんです）、近畿、中国地方の瀬戸内海沿岸を通って、九月二十八日に五島へ着き、その日のうちにもう五島を離れました。九月二十八日に五島から東シナ海に出て、翌日の二十九日に東シナ海の六八〇キロを渡りきって、揚子江の河口にいました。そして、中国の内陸に五〇〇キロ入ってから、南下を始めて、十月七日にベトナム。十二日にラオス、十三日にタイ、十七日にミャンマー、二十六日にブーケット島、三十日にシンガポール、三十一日にスマトラ。そして十一月七日にジャワ島、九日にジャカルタを経てタシクマラヤという越冬地に到着。

というふうにあります。五十二日間で九五八五キ

ロ。実に速いですよね、六八〇キロの東シナ海を一日で渡るって、すごいですよ。

さて、ジャカルタのタシクマラヤで越冬したあずみちゃんは、翌年の春、二月二十二日にジャワ島を出発します。三月四日にシンガポールを経て、三月十六日にミャンマーのケントンに到着します。ここは、中国の雲南省の山岳地帯に繋がる高地だそうですが、ここに三十七日間滞在しました。そして、五月七日に朝鮮半島の付け根、十一日にソウル、十三日に釜山、十四日に広島。それから広島から中国地方を斜めに横切って日本海へ出て、十八日に安曇野へ帰ってきました。この時、別のルートで来ると思っていたようだったので、朝鮮半島を南下して日本に帰って来たというの、とても驚きだったらしいです。

春の渡りというのは、観察されることがあまりないんです。日本から渡っていくときは、日本が狭いので、同じ時期に出発すると、固まって渡っていくのが見える。しかし、越冬地は様々なので、春に帰ってくるときは、いろんなところから帰っ

て来ますから、観察が難しいんです。

安曇野に帰って来たあずみちゃんは、実に正確に、何丁目何番地何号まで正確に帰ってきたそうです。帰りの旅は八十七日かけて二〇六五キロ。途中で一カ月以上ミャンマーにいたので、日にはかかっています。発信器をつけて衛星追跡したからわかった旅ですが、一羽一羽がそれぞれこのようにして旅しているんですね。このかつこいい鷹に限らず、うちに来る、ヒヨドリのビーちゃんだって、どこから来るのかわからないけれど、やっぱり冒険をして、命がけて、一羽一羽がそうやって渡っているんですね。

衛星追跡を、どうやってやっているかということ、鳥に送信機をつけます。そこから、人工衛星、これはアメリカの気象衛星ノアに信号を送って、ノアから地上の受信機に信号が来る。それを世界情報処理センターで処理して、インターネットで依頼者の元へ送る。それでわかるんだそうです。もともとは海流調査の為に、漂流ブイにつけて調査

をするものだそうです。衛星使用料が一日二千五百円程度かかるんです。だから、一羽の鳥につけると、大変なお金がかかるので、使用料の要らないGPS（全地球位置把握システム）の方に移行していくようですけれど、これをやるには、どっちにしても発信機をつけなければいけないわけですよ。これがとても大変なんだそうです。

この本を読んでいたら、とても面白いことが書いてあって、ロシアの研究者がツルに衛星への発信機をとりつけるときに、どうやってつけたかという話なんです。今は、麻酔を使ったりすることもあるらしいんですが、最初の頃のロシアの研究者は、嘘のような話なんですけれど、ヘリコプターで近づいて、すれすれまで近づいて、飛びおりて抱きついたっていうんです。冠毛期に、飛べない時期があつて、その時だと、抱きつけるんだそうです。でも、いくら丁寧に抱きついたって、人間が落ちて来るんですから、鳥を骨折させたら大変ですし、人間が骨折しても困るし、人間

も命がけだったそうです。

ここに「ワシタカ研究グループ」がやってる、十年分の鷹の渡り数の記録があります。これを見ますと、観察し始めた日は一羽とか、三羽とかです。もちろんピークの時にたくさん渡るのも感動的ですけど、最初に「あつ渡ろう」って鳥が本能的に思つて、たった一羽渡り始めるというのがね、なんとも素敵ですよ。ぞくぞくします。私はこの表を見ているだけで、ぞくぞくして、一晩楽しめるって感じですよ。こういうのが全部ネット上に出ていますので、是非、このホームページだけでもいいので、見てみて下さい。この東北地方でもおそらく野鳥の会の人たちが観察をしていると思いますので、是非、一度見に行つていただけると、人生の楽しみがまた一層増えるのではないのでしょうか。

先程お話ししたグループが出している『鷹の渡りハンドブック』という本なんですけど、この扉に書いてある文章がとても素敵なので、それを紹介して終わりにしたいと思います。

『見上げた空に鷹が飛んでいる。何十羽、何百羽という鷹が、いくつもの塊を作つて旋回している。ほどけるように一羽が集団を抜け出すと、他の鷹もそれに続いて、空に鷹の流れが出来る。一日に数千、あるいは数万という数の鷹が渡る日。季節が大きく変わつていくそんな日に、空を見上げていられたら…』

と書いてある。「ああ、空を見上げていられたら」って、いい言葉だなあつて思います。もし鷹の渡りが見られなくても、とても幸せな一日です。お天気が良くて、お中日の頃です。芒が靡いて、本当に空が高くて素晴らしい日です。そこに、おにぎり持つて、一日空を眺めているモノ好きは野鳥の会と俳人ぐらいです。

俳句の話に戻ります。鷹の渡りは例句があまりありません。私も作っていますけれども、あまりないので、みなさん、想像でも良いので作つて下さい。私の鷹の句もちょっと紹介します。昔、

渡り鳥なんか本当に見たことなかった時に、

双眸そうぼうに風ふうつよからむ渡り鳥

私が作った渡り鳥の中では、一度も見たことのない時に作ったこの句が、一番いいんじゃないかというくらい鷹の渡りを詠むのは難しいです。感動の方が上回つて…。他に、私が実際に鷹の渡りを見て作った句は、

帆翔はんしょうの翼向け合あい鷹柱

「帆翔」は、滑空ですね。旋回をして上昇気流に乗つて高く上がつていく鷹の姿っていうのが本当にうっとりするほどうつくしい。輪を描くために傾くんですね、だから鷹と鷹はまるで羽を向けあつているように、こう、うっとりとしていっく。見えて見えなくなるほど高く上がることがあります。見えるギリギリのところ、気流に乗つて流れ始めるときは、それこそすごい速さで、すーっと流れます。とても速いです。

青々と山河を流し鷹渡る

これはそれこそ、地球が動いている感じでした。

南みなみへ風強ければ鷹速はやし

いや畏しくも鷹と目の合ふ秋彼岸

これいつだったか総合誌に発表したら、目が合うなんて嘘でしょうと言われたんですけど、そんなことはないんです。夕方ごろになると、鷹はその辺で夜を越すために、降ります。木を物色するんですね。どの木に降りて、夜を過ごそうかって。その時、本当に目が合うんですよ。もう、鷹は私から見たらあこがれの的なので、目が合いそうでもドキドキして、本当に目が合うことがあるんですね。鷹は羽ばたかないから、下で私たちが見てると、「なんじゃ、この人たちは」っていう感じで、見下ろして目が合うことがあるんです。手を振ったりすると、振り返って見るんです、お腹の下から。そういうの、とってもかわいいです。おそろく若鳥だと思っんですよ。ベテランはそんなことしないんじゃないかと思っんですよ。

鷹消えていつか青空見ていたり

空冥の微塵となりて鷹渡る

「空冥」は空のこと、空っていうのをかっこうよく言ってみました。鷹にふさわしいように。

鷹渡る翼の上も下も空

続いて、「鷹渡る」の「歳時記」に載っている例句です。

鷹渡り全山の木々何急ぐ

米沢吾亦紅

鷹が渡ってしまくと、山は一気に秋深くなつていくんですね。

火山灰やみおそろしき空鷹渡る 邊見 京子
作者は鹿児島の人なので、おそらくサシバの渡りを見ていられるんだと思います。

うしお紙めつつ海渡る鷹といふ 山田弘子
この方はもう亡くなりましたが、ずっと宮古島に俳句の指導に通つていらつしやいました。宮古島は、沖繩に通る鷹たちが、本島から休憩なしで来て、やっと降りることが出来る。だから、ここはとてもたくさん集まる所なんです。私も一度行つてみたいと思います。

無の空に鷹現れて渡りけり

高橋 克郎

これは、私は観察しているのでよくわかります。向こうから来る時にいきなり見えるんです。目に見える地点つていうのがあつて、そこに無から

ポツとでて来るんですよ。これは実際に見た経験者の句だなあと思っています。

峰々を回廊にして鷹渡る

上澤樹実人

結局上昇気流が必要なので、山にぶつかつて気流が起こるところを、つまり峰々を伝つて来る、という句です。まだまだ見たこともない方が多いですから、例句も少ないので、これからどんな詠んでいきたいなと思っます。それで、こういうことを観察することがどんな役に立つかはわかりませんが、鷹の渡りを見ていると祈りのような気持ちも胸をいっぱいにします。お花を見るのもいいけれど、めつたに見られないからこそ、鷹の渡りというものに魅かれてなりません。この中で一人くらいはまつてくたされば嬉しいですよ。私いつだったか長野の姥捨でこの話をして、ちょうどその日がお彼岸の中日か何かで、いかにも鷹の渡りそうな日だったんです。姥捨山は白樺峠が近いんですよ。「私たち、今、今日こうやつて講演したり聞いたりしている場合じゃないんですよ。今きつとこの上を鷹が渡つていますよ。」つ

て言いました。「明日、私、行きたいので、誰か連れて行つて下さい」つて、そう言つて連れて行つてもらつたら、やつぱりその前日がピークでした。五千羽くらい飛んだんです。その後、白樺峠に行くと、あの時の講演で聞いたので、それからまつて毎年来ていますつていう方が、山の上に何人かいらつしやいます。素晴らしいことだなあと嬉しく思つております。

「翼を仰ぐ」―、私の一番好きなものの話をしました。ご静聴ありがとうございます。

プロフィール

まさき ゆうこ

熊本市生まれ。「沖」同人。

句集『水晶体』『悠』など。俳人協会評論賞受賞。

「読売俳壇」選者。

。かの鷹に風と名づけて飼ひ殺す

。水の地球すこしはなれて春の月

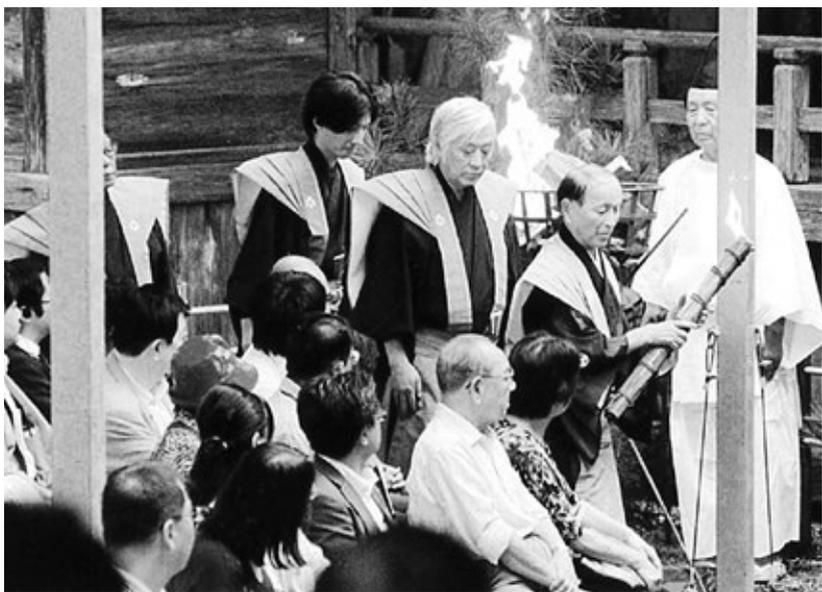
・成文に、芭蕉祭事務局の協力をいただいた。

「中尊寺薪能の 薪奉行を務めて」

小川 彰

薪能（たきぎのう）とは、夜間、野外能楽堂の周囲にかがり火を焚いて、能を奉納する荘厳な神事・仏事の儀式とされています。中尊寺薪能会場の能楽堂は約三五〇年前の江戸時代に建立されたと言われています。その後焼失し、一八五三年再建されました。「平泉の世界遺産」の中心をなす中尊寺の中でもベスト3に入る価値を持つのが能楽堂で、重要文化財になっています。

この度突然、中尊寺の元執事長である佐々木邦世様から、今年度の八月十四日開催の中尊寺薪能において薪奉行に推薦したい旨のお話を頂きました。大学としても大変光栄なことでありお受けしました。



薪奉行とは名誉職ではありますが、能の奉納に先立って、中尊寺白山神社祭儀から始まり、神職の手からご神火をいただき舞台三隅のかがり火に火を燈してゆく「火入之儀」などの儀式全てを取り仕切り「開会の挨拶」を行う重要な役です。初めて袴を着て役を務めました。

神事が滞りなく執り行われ、能が披露されるのが夕方五時、まだ明るい時間ですから薪の火は目立たないのですが、演目が進むにつれ、周囲は暗くなり「薪の火」に照らされて舞う「能」「狂言」に千名近い観客は「幽玄の世界」に引き込まれてゆきます。

演目は「喜多流

能」の「花月」「鶉飼」そして、「和泉流 狂言」の「水汲み」です。特に、狂言はTVでも有名な野村万作、萬斎親子が演じ、何れも素晴らしいもので、八時終演の三時間があつと言う間でした。

中尊寺薪能が中尊寺白山神社の能楽堂で行われ、「何故お寺の中に神社があるのか」、「中尊寺薪能なのに神社の神事が行われるのか」が不思議でしたが、日本固有の神祇信仰と仏教が混ざり合い、独特の行法・儀礼・教義を生み出したのが神仏習合（しんぶつしゅうごう）で平安時代から続いてきた事のようにです。

岩手医科大学を代表して大変な重役を務めて参りましたのでご紹介します。ぜひ、皆様も一度はご覧になってはいかがでしょうか。

岩手医科大学報より転載

中尊寺茶会を終えて

影山 紘子

去る十月二十二日、中尊寺様のお山は秋の紅葉も終盤を迎え朝から雨も降り始め、茶会受付に並ぶお客様も傘をさしてお待ちでした。この日催される茶会は、表千家流水月会の全国総会です。茶道会で「総会」と申しますのは、全国の同じ流派・会派に所属する会員が一堂に会して茶席を共にして、交流を図る催しでございます。水月会は全国に三十支部程あり、「平成二十六年の総会は岩手支部が担当」と言う会長からのお達しがあつたのは、一年半程前の事でした。京都に在住の会長は「岩手支部での全国総会は、会場を世界遺産となつた平泉中尊寺様をお借りして、是非行いたい」との強い要望を出されました。

支部長を務める私をはじめ、支部役員一同は会長の御要望を「はい」とお受けしたものの、その



法要中での供茶

時点では、本当に実現出来るのだろうか？と心配しておりました。

中尊寺と申しますと、岩手県民の多くは何度か

お参りした事のあるお寺様でございます。しかし、「世界遺産」となつた今では私達の手の届かない存在になつてしまつた様な気がしておりました。

まず、中尊寺の方々に、どの様に茶会開催の主旨をお伝えしたら理解して頂け、そして会場の借用をお許し頂けるものなのか？ほんとうに雲を掴む様な当てのない困難な問題でありました。しかし遠い京都の会長の意思は堅く、良い知らせをお待ちになつておりました。私達支部の実行委員達は、正に蟻達の相談の如く、頭を合せて考え尽くしました。がしかし、結局は「当たって砕けろ」の精神でお寺の門をたたき、行事の主旨をお伝えし、茶会の会場借用をお願い致しました。

中尊寺には今まで御縁の無かつた表千家茶道界の行事の話は、なかなか御理解頂けない感がございました。その後、数回お寺に向いては行事の主旨をお伝えし続けて、少しずつ御理解頂き、年明け二月四日、山田俊和貫首様との面会が実現致しました。私達は緊張の極みの態でお会い致しましたが、貫首様の穏やかなお顔・お声・そして広

い御心のお考えをお聞きしているうちに、緊張がサラサラと解けていきました。「お茶に表も裏もない。皆で仲良くやれば良いのです」との御言葉は、天からの救い主のお声の如く私達の心に沁みました。そして、大会の開催地にする事、茶会を本堂と書院で二席催す事。その上、東日本大震災被災者慰霊の法要をして下さる事を、全てお許し頂きました。晴れて平成二十六年十月二十二日表千家水月会全国総会中尊寺茶会は貫首様の読経で始まり、全国からお集まりの六百余名の会員は、秋の中尊寺茶会を心豊かに心ゆくまで楽しませました。その後、参加された会員の皆様より、如何に本堂での茶会が楽しく、また、金色堂が素晴らしかった等と言うお便りが続々と届きました。全てこれは中尊寺様のお陰と、感謝の気持ちで一杯です。

合掌

プロフィール

かげやま ひろこ

表千家水月会岩手支部長

長瀬さんのこと

小賀坂 勝 美

平成二十五年六月から三ヶ月間、平泉についてのエッセイを全国から募集した。

作家や文化人の書いた「平泉」は数多くあるが、いわゆる普通の人たちはこの地に何を見、何を感じているのだろう。文章にしたらどんな平泉が浮かび上がってくるのだろうか。ぜひ読んでみたい。私の長年の夢から始まったプロジェクトである。

わが町を題材に書いてもらうのだから、スタッフも資金の調達も平泉町内でやりくりしたい——私のこだわりは、町内の友人たちが実行委員会を立ち上げてくれた。

にわか作りの団体は公募事業の知識も自己資金もゼロだが、こんな心もとない私たちに、町内の会社や商店が快く協賛してくれた。知恵と力を授けてくれる人たちにも恵まれた。

印刷会社さんの協力で、私たちにはもったいないほど立派なチラシができて、観光客や東京の「銀河プラザ」のお客さんにも配った。県庁の記者クラブには、記事にしてほしいとお願いに行った。日本中に「平泉エッセイ・コンテスト」が伝わるよう、公募雑誌には思い切つて有料で募集要項を掲載した。もちろん手作りのホームページでもアピールした。

その結果、北海道から四国、九州まで二十三都道府県から二六六編もの作品が寄せられた。うち百十編が県外からのものだったことで「全国公募」に恥じない数だと、ひとまずほつとした。

数回の選考を経て、二十四編の入賞作品が決まったが、素人集団の私たちには表彰式をする術もお金もない。ホームページと県内の新聞で発表し、入賞者へは賞状、賞品、作品集『平泉を歩く』を発送することで終わった。

長瀬さんは、関東以北に偏つてしまった入賞者のうち、唯一、長野県在住の男性である。しかも当地を訪れたことのない人である。

作品『心の中の平泉』はこんな内容だ。

早くに父親を亡くした私を苦勞して育ててくれた母は、私が成人して、さあこれからだという時に失明。以来四十余年、介護を生き甲斐に暮らしてきたが、幸せにしてやれずに母は逝つてしまった。不甲斐ない自分を辱じ、生きる氣力を失つて絶望のどん底に。

そんな時、世界遺産になつた平泉の映像を見た。長瀬さんは「心の中を稲妻の青い閃光が走りぬけた」と衝撃の瞬間を書いている。

この世で見る極楽浄土：母はここに居る：平泉に行けば母に会える！ だが、平泉は遠く、若い先短い独居老人の願いは叶はずもない。それでも毎朝お茶を上げる時、一瞬、粗末な仏壇が金色堂に変わり、その奥で待っているかのように母が私にほほえむ。

最終審査の先生方にお渡しするために、実行委員会で絞り込みをしたが、この作品を読んだ誰もが「できることなら平泉に招待してあげたい」という思いにかられた。

しかし選考に私情は禁物である。それから用心も必要だ。実はこの段階で、とんでもないシロモノに出つくわってしまったのだ。

認知症の父親と平泉を旅する感動的な作品があった。情景描写も素晴らしい。あまりの筆力に、きつと入賞常連者なのだろうとパソコンで検索してみたら、出るわ、出るわの大活躍だ。受賞作品を読むこともできる。

だが、待てよ。手元にある応募作とまったく同じストーリーを、地名だけ変えて器用に使いまわし、何年にも渡つて、いくつもの公募展に上位入賞しているではないか。

このことで選考にはとても神経質になった。長瀬さんの作品も意地悪な読み方をすれば、平泉の金色堂でなければならぬ文章ではない。テレビに映つた別の地の、別の寺院に置き換えても十分に成り立つ。一抹の不安はあるが怪しげな検索結果が現れないので、とりあえず予選通過作品とした。

そんな折、中尊寺の法務部長さんから「頼まれ

てくれないか」と封筒を渡された。お守りを送ってほしいと、長瀬さんがお金を同封してきた手紙だった。読ませてもらうと、金色堂への想いが綴られ、作品が本物だと確信することができた。さっそく境内に何ヶ所もある札所から金色堂の札所のお守りを選んで送ったのは言うまでもない。エピソードはさらに生まれる。

ある日、東京のテレビ局の人から電話があった。長瀬さんに「幸せサプライズ」をプレゼントしたい、と匿名で作品集とカンパ金を送られてきた。番組で取り上げるかどうかは別として、現金の扱いをどうしたものか。趣旨が明らかなのでこちらに送ってもいい、という話だ。

予期せぬ出来事に、こちらもサプライズである。長瀬さんを金色堂に、という思いは匿名さんと同じだ。作品集に込めた私たちのメッセージが読みの心を動かしたようで、嬉しくもあった。けれども会としては、特別賞の後付けはしないことにした。残念だが、お金は局の裁量に委ねた。賞状を送るとき、長瀬さんには金色堂が大きく

写った観光パンフレットを特別に同封していた。本物の金色堂と対面する日が必ず来ることを願って、みんなで待つことにしよう。

当初予定していた事業計画はすべて終わった。作品集については、あちこちから思いがけない企画を持ちかけられ、広範に活用されて、その都度、嬉しい余韻を味わっている。

現在は隔週一編のペースでエフエム岩手の電波に乗っている。「町民たちによる作品朗読」という平泉支局の粋な計らいだ。長野県までは届かないが、『心の中の平泉』は二月半ばに放送予定である。

プロフィール

こがさか かつみ

「平泉エッセイ・コンテスト」実行委員会代表

古道踏査報告

菅野 澄 円

平成二十六年十一月五日〜七日の三日間、金丸義一先生に案内をお願いし、一山僧侶が境内の山林に入った。中尊寺の人間が外部の方に境内の案内をお願いするということが不思議に聞こえるかもしれない。中尊寺金色堂八百五十年祭記念行事の一環として境内の発掘調査がなされたのは昭和三十四年から四十三年にかけての十年間のことである。その指揮を執られていたのが藤島亥治郎博士であり、そのとき学生として参加されていたのが金丸義一先生である。金丸先生はその後も平泉の発掘調査に携われ、『中尊寺―発掘調査の記録』の編集にあたっても中心的な役割を果たされている。近年では平成二年から九年にかけて、中尊寺総合調査として未発掘の中尊寺山内の表面調査をお願いした経緯がある。

さて、この研修会の発端は、一山の者が古い道もその沿線にある石造物もよく知らないという現実である。一般に

中尊寺といえば、月見坂から金色堂までの参道沿いの堂塔を思い浮かべる。中尊寺一山の人間であればそこに南谷と北谷などが加わる。現存する古絵図に「中尊寺境内除地朱引繪圖」（寛永十八年）があるが、この時代から一山各堂塔の配置は大きく変化しておらず、少なくとも三百年間の中尊寺の道は変わっていないかった。月見坂の側道として町道戸河内線が開通したのは大正九年五月のことだが、開通以降も月見坂を登り境内を経由して戸河内へ向かう人のほうが多かったそうである。自動車が一般に普及し庶民の足となったのは昭和三十年代後半からのことと思われる。昭和四十三年には通称観光道路と呼ばれる町道鈴懸線が開通している。以来中尊寺と毛越寺あるいは戸河内を結ぶ道はこれら、車道が中心となり、実質六十年足らずの自動車社会の間に、住んでいる人間ですら歩いてきた頃の道について忘れかけているのである。まして平成育ち平成生まれの二十代三十代の者にとってはその存在すら意識することもなくなってきた。今回は学術的な意味合いはさておいても、まず一山の者が関心を持つとうというのが第一の目的である。

《金丸義一先生プロフィール》

芝浦工業大学建築学科講師を退職後、鎌倉市シルバー人材センター文化財班員として、鎌倉市内の発掘調査に従事。立教大学・東北福祉大学・他非常勤講師



蓮台野に立つ金丸義一先生

十一月五日

踏査に入る前に、金丸先生よりその意義・方法・これまでの経緯などについて講義を受けた。次に中尊寺中心部の地下遺構について再確認のため金色堂方面へ向かった。

伝多宝塔跡 伝金色堂跡 伝三重の池跡

伝多宝塔跡といわれてきた場所が、二階大堂であろうというのが藤島亥治郎先生の所見である。能楽堂の近くに無造作においてある大きな石が礎石だと考えられている。もっとたくさんさんの礎石があつて良いはずだが、他の堂塔に転用されたのだろう。私は先入観にとられ境内からの見え方にばかり気を取られていた。しかし江刺から平泉へ移られた清衡公にとっては奥六郡の人々に自分が目指す佛国土の象徴として、山上にそびえる堂塔を見せる必要があつたのではないか。ここから衣川瀬原地区がよく見えるということは、向こうからも、ここはよく見えるということだ。

かんざん亭前庭の鍛冶工房らしき遺構についても説明を受けた。釘や金具類は建築現場の近くで製造する方が当時としては効率が良かったのだろう。大工棟梁の注文に合わ

せて金物類が作られる様が想像された。伝金色堂から大長寿院の竹林の中を抜ける溝が道である可能性などについてもお話があつた。

現在、金色堂前参拝の記念撮影によく使われているこの広場の地中に、伝三重の池の遺跡が眠っている。その護岸と考えられる玉石敷きは毛越寺の大泉が池に比べても遜色のないものとの説明。参加した一山の者のほとんどは報告書上では理解したつもりになっていたが、改めて先生の指さす先に三重の池の有様を想像し、その規模を再確認した。

伝赤堂（閼伽堂）跡

平泉町営第二駐車場の一角に赤堂跡がある。「あか堂」は十七世紀後半に一旦廃絶し、宝暦年間（十八世紀中期）に金色堂近傍に閼伽堂として再建された。さらに昭和三十七年、開山堂として現在の場所（金色堂西）に移築された。赤堂跡は駐車場のなかで取り残されたような空き地で、規則的な礎石群を残すのみである。建物礎石として配列上は位置すべき箇所にも関わらず、地表に何も残されていない所を選び、ボーリング棒を差し込んで地中を探ってみるな



伝赤堂跡

ど、遺構調査の手法を体験した。秋には例祭も開かれ地域の人々に「赤堂さん」と親しまれている。現在はお稲荷さんの認識しかないが、この場所に薬師如来をお祀りした赤堂が現存すれば見方も変わってくる。

十一月六日

化粧坂

地藏院南西下から桜川を渡り西へ続く此の道は、いくつかに枝分かれしながら鐘ヶ嶽、塔山から毛越寺へと抜けるルートと、現在の戸河内線近くへつながり岩倉、戸河内へと通じる道になる。今でこそ松林、雑木林の間の林道の様相であるが、その沿線に遺構・石造物を見ることができる。鎌倉にも化粧坂があり、化粧に「身なりを整える」意味があることから「別世界に向かう」境界の意味と解されている。

伝峰薬師堂跡

かつての参道筋は不明のため斜面を十数メートル登ると、三方を斜面に囲まれ東に開けた平場がある。複数の石



化粧坂

造物があるはずだが、下草の枯れたこの時期でさえ、一見ただけでは見つけることが出来ない。仏堂と庫裡があったのではないかとのことである。平場の東端に排水溝のようなくぼんだ場所があるが、歩いて下つてみると玉石が敷かれており、これが往時の参道であった可能性もある。

峰薬師堂が現在の本堂西隣へ移転したのは元禄二年（一六八九）のことであった。現在、桜川の西側に位置する塔中は大徳院のみだが、伝熊野跡やこの伝峰薬師堂跡がある

ことよって繋がりをもつて考えることが出来る。

峰薬師堂経塚

峰薬師堂跡からさらに南へ斜面を登り頂に至ると経塚がある。残念ながら盗掘されている。経塚から芽吹いていた若木があつたが出来る限り伐採した。山岳信仰では山の頂を神仏として崇めるのだが、この頂を遙拝するための拝殿が伝峰薬師堂跡にあつた堂宇なのだろうか。

峰薬師堂経塚のある山から、西方にさらに小高い山があり、そこを目指す。円教院向かいの山である。ボーリング棒を刺せば石積みらしき物にあつて、これも経塚と考えられる。金鶏山経塚とこの山と釈尊院裏の経塚とが直線上にあり、意図をもって造られているとのことである。山を下つて遊歩道（ウォーキングトレール）へ向かうと、途中にも人工的な大溝がありこれも古道の可能性もある。

金峯山

町道戸河内線の西、円乗院・円教院の背後（北西）にあたる山である。中尊寺境内ではもつとも標高が高い。ルー



伝峰薬師堂跡

トを見つけられず険しい斜面を登ることとなった。

金峯山といえは、奈良県吉野の金峯山寺に由来する名前であろう。今回山頂に人工的な痕跡を見ることは出来なかったが、地図上では金峯山（高）、中間の山（中）、峰葉師堂山（低）がほぼ一直線等間隔で並んでおり、これも三尊を連想する信仰の対象としては十分な条件が整っている。

十一月七日

烏兔坂（馬車道）切り通シ

経蔵の裏から釈尊院方面、そして戸河内へと抜ける道である。昔は戸河内へ馬車が通る唯一の道であったという。現在でも軽自動車なら何とか通れそうな道幅で、比較的なだらかで歩きやすい。途中にある「切り通シ」は、近年の地震の影響か崩落もあり危険な状態であった。

烏兔とは中国の言い伝え「金烏玉兔（太陽・金のなかに鳥、月・玉のなかに兔がいる）」に由来する言葉。金峰山と月山（衣川）の間を抜けて戸河内へ至る道として洒落た名前である。

蓮台野

蓮台野については、墳墓でありみだりに立ち入るべきでないことは地域の人間であれば承知している。馬車道を通って戸河内へ抜ける最後の比較的なだらかで広い西斜面である。ここに複数の石積みがあり、これが墳墓と考えられている。金丸先生の説では、馬車道としていた近現代の道とは別に、道があること。蓮台野の中間にある細長いマウンドで何らかの域を分けていたのではないかとこのことであつた。

もちろんこの墳墓群が誰の墓であつたかは分からないが、夕日が差し込む西方を望む地形であり、遠く出羽の国を向いているようでもあり、幻想を膨らませてしまう。

後谷起

中尊寺北坂登り口から衣川沿いに戸河内へ抜ける道路があるが、現在は崖崩れのため永らく通行止めが続いている。近年の歴史では、中尊寺独自の生活用水取水口もこの近辺にあつた。昭和の衣川氾濫で水路自体も変化してしまっている。

通行止め道路の山側斜面の林道を戸河内側から大長寿院を目指して登った。途中、何か所かで人為的に運ばれたことを連想させる自然石が散見された。泉ヶ城から中尊寺へ向かうのが思った以上に近く、楽であることが確認できた。「谷起」という地名は、一関市の萩荘谷起島遺跡を始め、奥州市・一関市には何か所か存在するが、全国的には珍しいようである。

参加者

金丸 義一（鎌倉市シルバー人材センター文化財班員）

菅原 計二（平泉文化遺産センター）

菅野澄順 佐々木邦世、北嶺澄照、清水広元、千葉快

俊、菅原光聰、三浦章興、菅野澄円、佐々木五大、清

水秀法、佐々木亮王（以上中尊寺一山）

今現在、中尊寺を訪れる人だけでなく寺の者もが、山林と認識している寺域。そこを実際に歩いて感じたことと、生じた疑問の手がかりを求め紐解いた、明治の書籍に語ら



蓮台野墳墓

れる伝承の数々を合わせてみると、また中尊寺の別の姿が見えてくる。とかく「中尊寺落慶供養願文」と「吾妻鏡」の堂塔の整合性に議論研究が集中し、関心が注がれることが少ない谷々や峰々の伝承であるが、江戸期以降に再開発されてしまった現存の堂塔とは違って、時とともに忘れ去られ朽ちていったからこそ、奥州藤原氏時代の地下が存在する可能性も高いと思われる。

また、各峰の頂に経塚があることから、山岳信仰の視点でもっと広い範囲を立体的に考察してみることも必要だと実感した。

五十年もの間、平泉の遺跡調査に関わられてきた金丸先生と境内山林を踏査し、昔話を伺う機会も得、感謝を申し上げます。

清原氏のふるさと横手から、 平泉中尊寺に寄せる熱い思い

島田 祐悦

世界文化遺産平泉とその代表的な資産である特別史跡中尊寺は、平泉町のみならず東北の地に住む人々にとって地域の誇りであるとともに、心のよりどころともいえるでしょう。中尊寺金色堂の輝きは、東北地方が他の地域にない独自の文化を持つていたというあかしなのです。

藤原清衡によって平泉館（柳之御所遺跡）や中尊寺が造られ、その後二代基衡・三代秀衡・四代泰衡の代に及ぶまで、平泉は日本有数の都市として機能していました。その後藤原氏は滅亡するものの、歴代ご住職のご尽力によって中尊寺の位置付けは、不動のものと思われまます。

世界文化遺産に登録された平泉町は、日本有数



の観光都市であり、中尊寺やそれら文化にゆかりを持つとうと多くの自治体が結びつきの手段を考えられています。歴史的つながりを持たない自治体も、平泉町や中尊寺との関係を強めることで、地域の誇りや活性化に活かしています。それほど東北地域における存在は大きく、現代に至るまで一円の地域に、その威光を及ぼし続けていると言えるでしょう。

平泉成立前史である後三年合戦は、北東北を支配していた清原氏が内部分裂し、源義家と当時清原姓であった清衡が、清原武衡らと戦い、勝利したものでした。そのうち清衡は横手から、平泉に移ったのです。しかし、そのことが平泉・中尊寺とどのようなつながり、またどう解釈すればいいのか、横手市の誰ひとり見当がつかせませんでした。

平成十七年の市町村合併で、新生横手市が誕生したことにより、散在していた清原氏に関わる後三年合戦関連遺跡が、市内に包括されることとなりました。その後、平泉が世界文化遺産に登録されたことで、横手市への注目も集まり始めます。

これらのことからようやく横手市では、後三年合戦と関わりの深い清原氏関連遺跡と平泉とのつながりを明らかにし、地域活性化と観光に役立てようと調査を始めました。

その結果、明らかにってきたことは、横手と藤原清衡に非常に密接なつながりがあったということです。文献史学研究では、清衡の母方の祖母が、清原氏の本拠地である大鳥井山遺跡にいた清原光頼の姉か妹であったことがわかってきました。考古学では、清衡が建設した平泉館が、大祖父光頼のいた大鳥井山遺跡と構造が似ていることや、中尊寺大長寿院に残る土塁と堀の痕跡も大鳥井山遺跡とよりふたつであることが判明し、清原氏との深い関係が明確になりました。中尊寺金色堂の棟木に書かれた「清原氏」の文字には、これらの清衡のおいたちが少なからず表れているのではないかと思われまます。

平泉との歴史的つながりを自覚した横手の人々の胸はいま、平泉と中尊寺に寄せる熱い思いであふれています。



大鳥井山遺跡の二重堀

今年度、発掘調査を行った金沢柵推定地のひとつである陣館遺跡では、阿弥陀堂の可能性がある建物跡と、その参道らしき道路跡が確認されました。よって今後ますます中尊寺との関わりを調査研究していくこととなります。また沼柵の推定地沼館城跡では、中尊寺のご厚意により株分けされた中尊寺ハスが、毎年美しく花を咲かせるようになります。地域の人々の心のより処となっています。遺跡調査や地域向け講座なども、中尊寺をはじめ平泉町関係者の皆様に多大なるご指導をいただいております。これもひとえに清衡をなかだちとした歴史的なつながりがあればこそと、感謝の気持ちでいっぱいです。まだまだ物事の進め方には不慣れな身ではありますが、未永くお力添えいただければありがたく思います。

プロフィール

しまだ ゆうえつ

横手市教育委員会



沼柵推定地に咲く中尊寺ハス

秀衡街道沿いの中尊寺ハス

菊池 國雄

一 秀衡街道と中尊寺ハスの株分け

奥州藤原氏三代秀衡公と黄金文化に因んで名付られた「秀衡街道」は、岩手県北上市から西和賀町を経て秋田県横手市まで数十キロメートルにわたって今に息づいている。

藤原秀衡は仁平年間（一一五二～五四）、この道の最大の難所である和賀の仙人峠に、先祖秀忠の御霊を「仙人権現」（現久那斗神社）として創祀したと伝えられている。

また、秀衡街道は「黄金の道」とも称され、「たぬき掘り」で有名な鷲之巢金山や「秀衡掘り場」「金売吉次の隠し金山」などの伝承も残っている。

この街道沿いに中尊寺ハスを最初に株分けして頂いたのは、北上市和賀町岩沢の多聞院伊澤家で、平成十四年（二〇〇二）五月のことである。多聞院



写真1：多聞院伊澤家と中尊寺ハスの池

伊澤家は仙人権現の別当をしていた中尊寺ゆかりの地である。（写真1）

時あたかも秀衡街道の道筋を母体に、明治政府が殖産興業の一環として開削した「平和街道」（現国道一〇七号）が開通して百二十周年の記念の年であった。沿道の北上市と湯田町・沢内村（泉西和賀町）、横手市と山内村（現横手市）の五市町村による平和街道開通百二十周年記念事業を行っている最中であって、正に大輪を添えて頂いた。

また、平成二十年（二〇〇八）には、北上・西和賀・横手の三市町で構成する岩手・秋田県際交流事業実行委員会が「秀衡街道研究会」を立ち上げ、「秀衡街道に関する歴史や文化を再発見し、地域間の交流によって活性化を図り、次の世代に継承すること」を目的に、四年間事業を展開した。

その結果の主だった実績は次の三点である。

(一) 伝承されている従来の秀衡街道を基軸に、平泉・北上間の数十キロメートルと横手市内の山内筏^{いかだ}以西の数十キロメートルのルートを推定し、中尊寺から奥州市・金ヶ崎町・北上市・西

和賀町・横手市を繋いだ。

(二) 奥羽地方は鎌倉時代まで我が国の産金地であったが、秀衡街道沿いの金山は北上高地に次ぐ産金地帯であった。

(三) 秀衡街道探訪ツアーを実施した。三市町の方々を対象に北上・横手間と横手・平泉間を交互に四回行った。

また、平泉町世界遺産推進協議会の会員四十名を平泉から横手まで案内した。

更に、奥州藤原氏初代清衡公が幼少期から、後に秀衡街道と呼ばれるこの道筋を何度も往来する中で、平泉浄土思想が芽生え、育まれたのだということを再確認することができた。

この事業の期間中に、中尊寺の御高配により次の三箇所の中尊寺ハスを株分けして頂いた。

平成二十四年四月 和賀郡西和賀町湯川

湯川温泉

平成二十二年四月

横手市山内筏

平成二十四年四月

筏隊山神社

平成二十四年四月 横手市雄物川町沼館

沼柵跡

そして、多聞院伊澤家を含めて四箇所である。
 八百有余年の時空を超越して、中尊寺ハスを迎
 え入れた奥州藤原氏ゆかりの地は、それぞれ地区
 のシンボルとして心を込めて大事に育てている。
 次に各地区の現況と交通位置などをレポートし
 たいと思う。

二 株分けされた各地区の紹介

(一) 多聞院伊澤家

JR北上線岩沢駅から東へ徒歩で十五分(約一キ
 ロメートル)、北上線の北側に多聞院伊澤家が所在す
 る。羽黒派修験であった多聞院伊澤家は秀衡街道
 沿いにあり、かつて秀衡公が和賀の仙人峠に祀つ
 た仙人権現(現久那斗神社)の別当であった。この民
 家は江戸後期の修験住宅で、和賀地方の古民家形
 式を踏襲し、上手の座敷は社寺建築特有の円柱、
 虹梁、大瓶束等を配した遺構である。屋敷地内に
 ある里宮とともに平成二年(一九九〇)、国の重要文
 化財に指定された。

中尊寺ハスを株分けして頂いたのは平成十四年
 五月であった。岩沢自治会が中心になって地区民
 が総出でハス池を造った。同二十年にもその南側
 に第二のハス池を造成した。



岩手日日新聞 平成26年7月27日

例年、中尊寺ハスが咲き誇る七月の最終土曜日、
 中尊寺貫首をお招きして久那斗神社境内で青空法
 話を開催し、今年度は十一回目を迎えた。
 観光客が年々増え、大阪・東京方面からも来訪
 するようになり、年間二千人余りにものぼる。
 「多聞院伊澤家と中尊寺ハス」は、平成二十一
 年度「きたかみ景観資産(北上市認定No.36)」に認定
 された。

(二) 湯川温泉

JR北上線ほつとゆだ駅前から岩手県交通のバ
 ス「湯川温泉行き」に乗り、岩手県道二一五号(湯
 川温泉線)を十分(四キロメートル)走る。バス停「湯川
 地区公民館前」で降りると、その先に「中尊寺ハ
 スと秀衡街道」の案内板が眼に入る。

秀衡街道沿いには、たぬき掘りの鷲之巢金山や
 畝倉山・明戸山などの金山跡に「秀衡掘り場」・「金
 売吉次の隠し金山」の言い伝えがある。

湯川温泉はこれらの金山跡から西方へ数キロ
 メートル、秋田県寄りの秀衡街道沿いに湧出して



写真2：中尊寺ハスを愛でる湯川百年クラブの方々

いる。前九年合戦が始まった永承年間（一〇四六～五三）に開湯したと伝えられている。

西和賀町役場は県道の東側、秀衡街道と交差する一画に「中尊寺ハス池公園」を造成した。公園は谷間のアップダウンを利用して作られ、平地にハス池、小高い丘に東屋、南へ下った所に「黄金の道秀衡街道」の案内板が設置されている。

株分けされた年は、池の水が冷たかったのか花を観ることが出来なかったが、翌年から咲き始め、二十六年は見事に咲き誇った。公園の管理や整備は、湯川地区協議会が行っているが、地元の老人クラブ「湯川百年クラブ」にも草刈りなどを手伝ってもらっている。（写真2）

（三） 筏隊山神社

J R北上線相野々駅前から秋田県道四十号（横手・東成瀬線）を羽後交通のバス「三又」行きに乗車して十分（四キロメートル）「筏」バス停で下車、右手の山腹に筏隊山神社（仙人権現）が鎮座する。

「本社^{三福}向東也。こは正中二^三年二、山北三郡

このように秀衡街道を往来する旅人の安全を祈り、奥羽山脈の西側の守護神として崇敬されてきた。

中尊寺ハスの池は横手川の左岸、県道四十号と筏隊山神社の鳥居の間に広がる休耕田を活用して、横手市の「元気がでる地域づくり事業」の一環として、同市山内地域局が造成し、池の周辺の休耕田一九二二平方メートルには、地区の方々によってキバナコスモスやヒマワリが植栽されている。

（四） 沼柵跡

横手バスターミナルから国道一〇七号を由利本荘市方面行き（本荘線）のバスに乗車して四十分（三キロメートル）、バス停「新道角」で下車、徒歩十分程で横手市史跡公園沼柵跡（推定地）へ行き着く。中世の沼館の本丸跡と伝えられる所には、真言宗の雄勝山蔵光院がある。寺院の南側一帯は雄物川の氾濫原であるが、中尊寺ハスの池が造られている。

横手市雄物川地域局が立てた案内板「中尊寺ハスと沼柵」によると、沼柵は、後三年合戦のさな

の領主小野寺前伊豆守藤道宣公ノ草創也。そもそも此仙人権現は陸奥国和賀ノ郡の仙人峠に座し御神形を、後醍醐天皇の御代に此平鹿郡梓^{いかにら}邑に遷し奉るならむ。」（菅江真澄全集「第六巻」）



写真3：筏隊山神社鳥居と県道間に咲いた中尊寺ハス

か、応徳三年（一〇八六）に清原家衡が籠り、その兄にあたる奥州藤原氏初代の清衡が八幡太郎源義家とともに攻め寄せた場所であり、後に清衡は「中尊寺建立供養願文」の中で、多くの戦いで亡くなった人々の霊魂を浄土に導きたいという思いを綴っている。この地に中尊寺ハスを植栽することで、いにしえの戦乱で亡くなられた方々の霊をお慰めし、恒久平和を祈念する、と記されている。植栽には、沼柵跡地内にある雄物川北小学校六年生の代表七名も加わった。児童達は六月の修学旅行でも平泉・中尊寺を訪れている。

草刈りや水などの管理は、地元地域おこしグループ「明道塾」が行っている。地続きの湿地に第二の池を造る計画である。

プロフィール

きくち くにお

北上市立中央図書館調査員。市立和賀公民館元館長。平和街道百二十年記念事業実行委員会事務局長。

心がけより言葉がけ

北嶺 澄照

昨年の三月、一関市内で行われていたある書展を見学する機会がありました。「心がけより言葉がけ」と書かれた短冊があり、しばらくその作品の前で立ち止まりました。

三月はいわゆる「巣立ちの時期」で、四月には入園・入学・入社と、新しい生活を始める人が大勢います。「入ってくる人たち」にも「迎え入れる人たち」にとっても大切な言葉であると感じ入りました。

中尊寺の一員として考えたとき「言葉がけとはアクションを起こすことだ」との思いが浮かびました。世界文化遺産となり、国内外を問わずおいでくださるご参拝の方々（入ってくる人たち）は何を求めて来山されるのか、寺の人間（迎え入れる人たち）は信仰・歴史・文化をはじめ、景観・安全性・快適性等々、あらゆる面においてモアベターをめざしてアクションを起こし、一步一步前へと地道に進んでいかなければならないとの意を新たにしました。

「ろぶわよ」と、微笑ましい親子の声が、夏休み中境内を賑わせたのでした。



紅葉の時節には、「紅葉のしおり 人も旅人われも旅人」を作成しました。境内に舞い落ちるモミジやイチョウの葉を貼り、旅の想い出を書き添えていただくというもので、中高年層の方に喜んでいただくことができました。

しかしながら、周知に関して期間が短かったことは否めませんし、印刷物の表記についても若干の問題がありました。反省すべきことは反省し、総括をきちんと行って、次

短冊にしたためられた九文字十二音は、二重の意味で胸に響くものがありました。

*

中尊寺も世代交代が進み、現在の内局（執行部）は五十年代以下で構成されています。

平成二十六年度に入り、今までは少し異なる角度からご参拝のみなさまへアプローチしようとする取り組みが行われました。

夏休みには、子供たちの自由研究をサポートする講座と「クイズラリー」中尊寺2014」を開催しました。

講座の方はインターネット上で募集をしたところ、遠くは関東地方からの応募もあり、若手の僧侶が参加者とともに山内を歩き、自由研究のヒントを提供することができました。

クイズラリーは応募用紙と記念品が足りなくなるほどの大盛況で、担当者うれしい悲鳴を上げることになりました。「次の問題は東物見だつてさ」、「おとうさん、おかあさん、あっちあっち。早く行こうよ」、「そんなに走つたらこ

年度の糧としていくことは言うまでもありません。

三つの小さな小さな種をまいたわけですが、お持ち帰りいただいた想い出が、やがて芽となり花となり、「東北へ行くなら、もう一度中尊寺に」という実がひとつでも多く結ばれることを願いました。まさに「小さなことからコツコツと」でした。

世界文化遺産に登録されて以降、中尊寺事務局に所属する常勤の僧侶・職員は、「どのようにしたらみなさまに気持ちよくお詣りしていただけるのか」をテーマに研修を継続的に実施しています。

今年度は、常勤者が八つのチームに分かれ、われわれ僧侶はアドバイザーに徹することにして、職員がイニシアティブをとり、六月から半年間にわたって活動しました。それぞれのチームごとに目標を定め、その達成に向けてチームミーティングを繰り返して方策を考え、内局と協議の上、実行に移していったわけです。十二月には各チームが成果を報告するプレゼンテーションが行われました。

境内の案内標示板のあり方に取り組んだチームは、場所

ごとに地図の向きを変えて、お詣りの方にわかりやすいものを設置してはどうかと提案、さらに境内の植物・句碑に関する資料を作成して好評を得ました。

ほかのチームについていくつか挙げてみますと、

・境内の清掃に関する問題をチェックし改善

・寺内部で情報共有ができる体制づくり

・ゲリラ豪雨対策

・わかりやすく、使いやすいトイレ

ご参拝の方々の目線に立とうと努めている職員ならではの着眼でした。

ゲリラ豪雨対策について発表したチームは救護室や授乳室についてもふれ、リーダーが「誰もが安全・安心と感じる中尊寺にしたい」と述べたのが印象に残りました。

八チームがそれぞれ目



標としたものは、どれもが中尊寺を訪れる方々へのホスピタリティ（おもいやり、おもてなし）の向上をめざしたものでした。今、中尊寺の現状はどうかを考え「このようでありたい」という姿を思い描き、着実に実行へ移していくことの必要性を参加者誰もが感じた研修会でした。

特にも、われわれ常勤の青壮年僧にとつての喫緊の課題は、ご来山のみなさまとの接点を如何に増やすかということです。一昨年十月の慈覚大師報恩法要の際に併修された念仏会は、どなたでも参加いただける法要で、六百人を超える方々と御縁を結ばせていただきました。これからは、事務所や朱印所から一歩外に出て、本堂はじめ諸堂及び境内で、一方通行ではなく「一緒に拝む、お互いの顔が見える、そして話したり話しかけられたり」という相互通行ができる中尊寺でありたい、その意を強く持ちました。職員主導の研修会を通じて、わたしたちが「大切なものを再認識させてもらった」のでした。

*

平泉町内に設立されたNPO法人みんなで作る平泉が

主催する「みんなでまなぶ平泉学」が十一月に中尊寺で開かれました。世界遺産平泉の構成資産をはじめ、歴史と文化に培われてきたふるさと平泉の由緒ある各地を訪ね、ともに学ぼうという企画です。

「話す人にも勉強してもらいたい。お互いが学ぶのです。みんなでまなぶ平泉学ですから。講師は会員である北嶺君と佐々木五大君ということ」と理事長の一言で、浅学非才、未熟な五十代と発展途上中の三十代が講師をとめることになりました。

当日の参加者は十四名でしたので、二班七名ずつに分かれてもらい、本堂から願成就院宝塔、鐘楼、讃衡蔵館内、金色堂、経蔵、旧覆堂、白山神社能舞台をめぐるしました。顔見知りの方が多く「平泉好き」な方ばかりですから、鋭い質問も次々と出てくるわけで、冷汗をかく場面もたびたびというありさま、予定時間を一時間オーバーしての研修となりました。

参加者Cさん「今まで中尊寺の和尚さんと話なんかしたことなかったです。いろいろなお話もよかったですけれど、

和尚さんと話ができながいちばんよかった」

同じくOさん「平泉に移り住んで三十年近くになります。中尊寺は何回もお詣りしていますが、経蔵の中には初めて入りました。和尚さんと一緒だから入ることが出来た、今日は参加してよかったです」

Yさん「勉強してきたことをもう少し自分の言葉であらわし、伝える工夫を。話したい気持ちはよくわかりますが、時間内でおさめない。これからも精進してください」
ありがたい言葉、手厳しい言葉、たくさん頂戴しました。

この日は十一月初旬の土曜日でしたから、ご参拝の方もかなりおいでになっていました。鐘楼の前で供養願文の話をしていると、数人の方が足を止めて聞かれています。経蔵では、三名の学生さんが丁寧に「わたしたちも入ってよろしいでしょうか」と声をかけてきたので、「どうぞ」といい、一緒に堂内に入りました。平安時代の古材に遺っている彩色について説明を終え、堂外に出ると「ありがたいございました」とそろっておじぎをして、旧覆堂の方へ向かって行きました。

中尊寺を訪れる人は、奥州藤原氏が築き上げた「浄土」とは何なのか体感したい、そして遺された歴史、文化にふれようとご来山されるわけですが、二十一世紀は「心の時代」といわれています。開山慈覚大師以来の伝統を守りつつ、今以上に「人と人のふれあい」のある中尊寺に、そうあるべく、一山の人間はチェンジアンドチャレンジしていかなければならないのです。

*

「みんなでまなぶ平泉学」参加のみなさんと一緒に、中尊寺の山内を二時間半かけて歩いて、最後に二つの言葉を紹介しました。

ひとつは町内のSさんという方が詠まれた「世界遺産草刈ることがおもてなし」という俳句、二つ目は冒頭に紹介した「心がけより言葉がけ」です。

Sさんが詠まれた句では「草刈ること」がおもてなしです。そして、自宅の前にベンチを出して観光客の方に座って一息ついてもらうことも、「こんにちは」と一声かけることも、道案内することも、どんなことでも平泉

を訪れた人へのおもてなしになりますね。

「心がけより言葉がけ」の「言葉がけ」は「アクションを起こす」ということではないでしょうか。心の中で感じている何かを行動に移すことです。

世界遺産のまち「平泉」に暮らすわたしたちが忘れずに大切にしていきたい言葉だと思います。

書展に短冊を出品されていた方が、この日たまたま参加されていました。

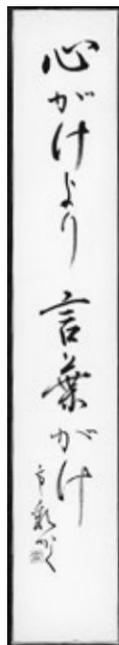
「あれでよろしかったでしょうか」

と訊ねたところ、

「言葉がけ＝アクションを起こす、いいですね」

と小さくうなずかれたのでした。

(薬樹王院住職)



まちづくり活動

小野寺 郁夫

「みんなで作る平泉」は、一昨年平成二十五年七月に平泉町を中心とした住民有志によって設立された特定非営利活動法人（NPO）です。

平泉町内には、これまでも様々なまちづくり団体が存在し、それぞれ特色ある活動をしておりましたが、法人格がないために公的事業への参加や資金面などで限界を感じておりました。そこで、法人格をもつことにより、積極的なまちづくりを展開しようと設立されたわけです。現在の会員数は二十四名で、中尊寺、毛越寺の僧侶や、町議会の方も、一会員として参加されております。

平泉町の文化の向上、および周辺地域の活性化と発展を目的として、多様な視点からまちづくりのアイデアを持ち寄り、「平泉文化」への理解を深め、町民が誇りを持てる地域づくりを目指して



「大文字送り火」火床作り



世界遺産登録3周年前夜祭

年おめでとう。五周年に向けてもっといいまちにするために大人の人たちは頑張つてほしい。私たちも頑張ります」と、私達に新たな目標と決意を与えてくれました。

二つめは、白山妙理堂への小路石敷き整備事業です。駅前振興会と共催で中尊寺通り周辺の環境整備と観光客の利便性の向上を目的に、町内外のボランティアに約五十名が中尊寺通りから白山妙理堂まで約百三十メートルの小路に六百枚余りの御影石を敷き詰めました。これは平泉町からの委託を受けたもので、官民協同による新しい試みでもありました。

三つめは、初年度に実施した景観アンケート調査をまとめ景観提言書として平泉町に提言しました。アンケートは、町内に事業所を置く会社などを対象に実施しましたので、町外の方々から初めて貴重な意見を得ることができました。これらの意見を三項目にまとめ提言し、町の担当課では、早速これに基づいて取り組みを始めています。

その他、大文字の火床作りも継続、町民対象の

おります。主たる活動は、①まちづくりの推進、②学術、文化、芸術、スポーツの振興、③観光の振興などを主題に活動してきました。

設立初年度は、事業期間が八カ月間でしたが六事業行いました。

八月、平泉観光協会から委託を受け、大文字送り火の火床づくりを行いました。平泉中学校の二年生及びその保護者の方々と共に、汗を流しながら作業を行いました。二日間に行いました。不慣れた点も多々ありましたが、その経験は翌年に炎天下の中フラフラになりながら行いました。不慣れた点も多々ありましたが、その経験は翌年に生かされました。

十一月には、日本デザイン振興会より寄贈された本十冊を当法人が窓口となり、まちづくりの意識高揚のため、平泉中学校へ「まちづくり文庫」として寄贈を行いました。今後何らかの形で、まちづくりを担う人材として活躍して頂けるよう支援していきます。

三月には、県教育委員会へ平泉に「平泉文化」を研究する県立研究機関を設立するよう求める要

望書を提出しました。研究機関設置はこれからの平泉研究にとって是非必要なものであり、今後も設置に向けた普及活動や機運醸成活動に取り組んでまいります。

その他の事業として、スポ少へ活動支援金を交付、景観に関するアンケート、「中尊寺を歩く」と題した研修会などを実施してきました。

二年目の平成二十六年度は、八事業を実施。その中にはNPOだからこそ出来た事業が三事業あります。

一つは、六月に世界遺産登録三周年を記念しての、町民手作りによる「前夜祭」を行いました。三周年を祝うと共に今後のまちづくりを町民自ら取り組んでいこうという意識で企画し、町内十六団体の方々が快く手弁当で参加して下さいました。イベントが始まると、それまで降っていた雨も登録三周年を祝福するかのようになり、夢灯り、太鼓、踊りなどで盛り上がり、その最後に、ユネスコ文化財愛護少年団三名の少年達が五周年に向けての決意文を読み上げました。「世界遺産三周



白山妙理堂への小路石敷き整備事業

「みんなでまなぶ平泉学」を、中尊寺、毛越寺で開催しました。普段、直接話を聞く機会も無いNPO会員でもある両山の僧侶による丁寧な解説を聞いて歴史や文化に少し理解を深めました。本年三月までには、まちづくり講演会なども実施する

予定です。

設立三年目に向け、会員並びに支援者の増加、活動の充実、そして、個人会費のみで運営している活動資金の確保など、課題がありますが、今後は活動の中心となる柱を三事業ぐらい作って、NPOの役割や使命をより以上に鮮明にすること。行政、他団体等と連携協同しながらも、当団体でなければ出来ない活動の「幅」と「輪」を広げていきたいと思っています。

プロフィール

おの いくお

特定非営利活動法人みんなで作る平泉理事長

三陸郷土芸能奉演開催報告

破 石 晋 照

平成二十六年、四回目の開催を迎えた「三陸郷土芸能奉演」は十月の三連休に行われました。昨年の開催は、おからの台風の影響をうけ、屋内での奉納となつてしまいましたが、今回は好天にも恵まれ、たくさんのお客様が来山される中で開催することができました。

十月十一日

初日に奉演いただいたのは南川目さんさ踊りと甫嶺獅子舞の皆様です。南川目さんさ踊りは、伝統さんさの団体で、花笠をかぶり「キタコラサツサー」の掛け声とともに、太鼓を叩き活発に踊る若い踊り手の皆さんが印象的でした。甫嶺獅子舞は、かつて、大津波や凶作に見舞われたとき、住民たちが無造作に踊り、厄を祓ったことが始まりとされ、縦横無尽に飛び回る、躍動的な獅子舞です。所狭しと繰り広げられる激しい獅子舞が、お客様の心をつかんでいました。



南川目さんさ踊り



甫嶺獅子舞

十月十二日

二日目の境内では、津軽石さんさ踊り、鵜住居虎舞の皆様による奉演が行われました。魚介類や塩などを内陸に運んで商をし、米や日用品などを買って帰る商隊の若者衆が伝えたと思われる津軽石さんさ踊り、本堂から金色堂までの百メートルあまりの参道を大きな掛け声とともに踊り、お客様の拍手を集めていました。鵜住居虎舞は江戸時代中期にやはり岩手県内の下閉伊郡から伝わった虎舞で三陸の虎舞の中でも優雅な舞が特徴とされ、俗に「雌虎」と呼ばれ



津軽石さんさ踊り



鵜住居虎舞

ています。色あざやかな虎頭の登場に歓声が上がっています。

十月十三日

最終日の空は台風の影響で少し曇りがち、まず登場したのは大槌町の城山虎舞の皆様、平成八年に大槌町の若者有志で結成された団体で、中尊寺の三陸郷土芸能ではお馴染みの団体です。激しい虎舞に加え、南部俵積み歌にあわせて手踊りもご披露いただきました。最後に登場したのは桜



城山虎舞



桜舞太鼓

舞太鼓の皆様。昭和二十八年に発足し、その技を磨きながら伝承されてきました。桜の花びらが舞い踊る様をイメージした一糸乱れぬ勇壮で華麗な撥さばきによって生み出される太鼓の響きが、境内にこだましました。

たくさんのお客様が足を止め、しばし皆様の奉演に見入っておられ、大きな拍手を浴びながらのすばらしい奉演となりました。ご参加いただいた諸団体の皆様、大変ありがとうございました。

叡山講福聚教会六十五周年

平和祈念沖縄大会に参加して

— 沖縄本島周遊の旅 —

菅原 信 行

十月二十八日早朝に平泉を出発し、仙台空港にて、菅原光中団長のもと福聚教会会員、私ども中尊寺檀信徒総代等、総勢五十五名の結団式を行いました。沖縄三泊四日の旅です。沖縄は初めてという人も多数おり、かく言う私もその一人で、胸を膨らませて搭乗口へと進みました。三時間ほどのフライトで沖縄に到着しました。

バス二台で那覇市首里城へ。守礼門は中国皇帝の使節である冊封使を歓迎する為の装飾の門で、二千円紙幣の図柄にも採用されています。城郭に入る歓会門から瑞泉門、漏刻門。漏刻とは中国語で水時計のこと、門の上の櫓に水槽を設置し、水槽から落ちる水の量で時刻を測っていたそうで



す。福を広めるという意味の広福門から奉神門。昔は、中国皇帝の使節である冊封使など限られた人しか通ることが出来なかったそうです。

南殿・番所から履物を持ち、書院・奥書院・黄金御殿を通り正殿へ。一階は下庫裡と呼ばれ、主に国王自ら政治や儀式を執り行う場でした。中央の綺麗な部分が「御差床」と呼ばれる国王の王座で、そこはまさに琉球王国の華麗な王朝文化に彩られた空間です。約四五〇年間、王制の国として繁栄した様子がうかがえました。

首里城は那覇港を見下ろす丘陵地にある県内最大規模の城であり、度重なる災害や戦火で改築・再建を繰り返しており、第二次世界大戦の沖縄戦では辺り一面が焼け野原となりました。今の首里城は、平成四年に復元されたものです。中国と日本の築城文化を融合した、独特の建築様式や石組み技術には、高い文化的・歴史的な価値があるとされ、平成十二年十一月、「琉球王国のグスク及び関連遺産群」の首里城跡として世界遺産に登録されました。

翌日、沖縄平和祈念公園に向かう途中で、糸満市にあるひめゆりの塔に行きました。第二次大戦末期の沖縄戦で、看護隊として動員され戦死した沖縄師範学校女子部と、沖縄県立第一高等女学校の生徒・教師の鎮魂のための慰霊碑です。

看護活動を行っていた最後の場所、病棟として使われていた洞窟の真上に建てられており、慰霊塔に献花をして皆でご冥福をお祈りしました。

すぐ隣のひめゆり平和祈念資料館では「ひめゆり学徒隊」二百余名の犠牲者の遺影や遺品、貴重な証言などの資料がわかりやすくまとめられ、学生ながら看護業務に就き、昭和二十年六月十八日、沖縄陸軍病院より解散命令が出され、戦場をさまよう内に、次々と砲弾に倒れて亡くなっていった様子が心が痛む思いでした。

戦争体験者が年々少なくなっていく今日、国内唯一の住民を巻き込み、地上戦となった沖縄戦がどんなものであったのか、元ひめゆり学徒たちが語り部として体験を通し、若い世代に戦争の実態を伝えておりました。年間六十万人余りが平和学

習や慰霊、観光でこの地を訪れるそうです。

バスに乗り、糸満市摩文仁にある沖縄平和祈念公園へ。ここでも資料館を見学、「戦争」の二文字に深く考えさせられました。いよいよ目的の平和祈念堂です。堂内に安置されている高さ十二メートルの平和祈念像は、沖縄の人々あるいは全人類の平和のシンボルでもあり、その胎内には「平和の礎刻名者名簿」が納められているそうです。

ここに福聚教会会員が一堂に会し、叡山講福聚教会六十五周年平和祈念沖縄大会が開催され、叡山講福聚教会総裁、天台座主半田孝淳殿下からお言葉を戴き、平和祈念法要が厳粛に執り行われました。

この大会に合わせて制作された「平和祈念和讃」の奉詠舞が披露されました。

平和祈念のご和讃

一、珊瑚の海に かこまれて
うるまの島の 美しさを
おもえば過ぎし 戦いに
逝きしみ霊は 数しれず



二、尊きいのち その上に
世界平和を 念じつつ
われら祈らん 冥福を
ともに祈らん とこしえに

目頭が熱くなり、居た堪れない気持ちになりました。叡山講福聚教会副総裁である木ノ下寂俊様のご挨拶で大会は締められました。

翌三十日、宜野湾市にある「沖繩コンベンションセンター」へ。この会場に福聚教会会員が一堂に会し、「叡山講福聚教会六十五周年・平和祈念奉詠舞沖繩大会」が盛大に開催されました。また、ブロック別では奉詠舞順序二番目に、北海道・山形・陸奥・福島各本部の福聚教会会員の皆様が、ステージいっぱい「浄邦和讃」を披露。平和祈念法要も執り行われ、沖繩伝統芸能も観賞して会場を後にしました。

燦々と輝く太陽の下、バスは本島の北部へ。海岸近くのホテルで一泊、大会日程無事終了後の懇親会は、和気霽靄と楽しいひと時を過ごさせてい

ただきました。

旅の最後の日は、万座毛へ。東シナ海に面し、隆起サンゴ礁の岸壁から見渡す海と空とのコントラストは息を呑むほどの美しさでした。沖繩の四日間は、爽やかな天気にも恵まれた素晴らしい旅になりました。

プロフィール

すがわらのぶゆき
中尊寺檀信徒総代

中尊寺総代長を

つとめ終えて

千葉 明

平成十八年より二期八年間、中尊寺総代会会長をつとめてまいりました。中尊寺総代世話人会では、「総代長」と呼ばれてまいりましたが、この「総代長」という言葉は正式には規約にあるわけではなく、中尊寺総代会では通称としてつかわれてきました。在任中には、中尊寺総代長だけでなく、岩手県内の檀信徒会の会長、さらには宮城、岩手、青森三県の天台宗陸奥教区檀信徒会の会長と副会長を六年間勤めさせていただき、この間の二年間は、天台座主猊下の命により天台宗檀信徒会の役員として、会計の役職を担当させていただきました。それらは決して私個人の實力ではなく、中尊寺の、という背景があったからこそだと思えます。



春の藤原まつり四代公追善法要に先立ち感謝状が送られた

執心の至芸「釣狐」を観る

佐々木 邦 世

十一月、国立能楽堂



「袴狂言 釣狐 前」白蔵主：野村万作

入場する際に、それぞれ一枚の紙を手渡された。

〈シテが幕に飛び込んだ後……〉そのまま静かに聴いていてほしい、というのである。

舞台は、老狐が僧に化けて獺師に殺生を思い止まらせようとする

場である。付ける面おもてをつけず、袴姿で装束もつけない。化けても手足は狐の所作で演じる。所作だけでなくて、その悲痛な思いが見所を包んでゆく。

ヒョンヒョン跳ぶように動きまわっては、ヒタと止まって、首を

この度退任するにあたり、思い残すことは、当初予定していた天台山への登山参拝が諸般の事情で中止になったこと、また、ひそかに計画をしておりました春の藤原まつりの義経公東下り行列に参加することが叶わなかったこと、でございます。そのほかにも在任中の想い出や昔話を上げていけ



ばきりがございませんが、この六年という時間の中で、総代長をつとめていたご縁により巡りあうことができたたくさんの方々、また、たくさんのおい出は、私にとってかけがえの無い宝物となりました。

おわりに、未熟であった私が無事に退任の日を迎えることができましたのは、中尊寺一山の皆様をはじめ、副総代長、また会員の皆様のおかげと感謝致しております。あらためてお礼を申し上げ、今後の総代会の一層のご活躍を祈念致します。

プロフィール

ちば あきら
中尊寺前総代長

傾かたぐ。凛りんとした語りも、延々とまさに最奥の藝、難曲であろう。野村万作先生には、先代万蔵師の時代から、中尊寺の能舞台で喜多流の演能がある度に御出演いただいていた。あの野外舞台を大事に思ってくださいって有り難い。

シテが、幕にはいった。
ひとつ間があつて……

「クワイン」

悲壮な「名残の一声」であった。能・狂言は、余韻アトモスフィア、空気が大事と、土岐善麿氏から五十年前に聴いた話が実感された。

(撮影・政川慎治)

県南広域振興局経営企画部世界遺産推進課に赴任したのは平成二十一年四月のことでした。平泉出身というわけでもなかったのですが、その後五年も関わらせていただき、多くの体験をさせていただいたのは、ありがたいご縁だったと思います。

当初、世界遺産推進課は奥州地区合同庁舎に所在していたのですが、翌平成二十二年四月には、地元との連携を密にするという目的のため、平泉町役場に駐在することとなりました。観光誘客を目的とした情報発信（各種イベント等でのPR、巡回展の実施等）、受入態勢の整備（二次交通や店舗を紹介したリーフレットの制作）などを行っておりました。



県南広域振興局の若手職員が手作りした紙芝居「みんな なかよし ひらいずみ」のプロジェクトにも関わり、各種イベントや地域での上演を手伝ったりしたのも楽しい思い出です。中尊寺や役場の方、読みかかせボランティアの方にも参加いただき、多くの子ども



たちに藤原清衡公の理念の大切さを、少しでも伝えることができたのではないかと思います中尊寺で企画した「二〇一三年のきみへ（きよひらさんへのメッセージ）」では、紙芝居のキャラクターや理念を取り入れていただきました。子供から大人まで、数多くの方からお寄せいただいたメッセージを中尊寺本堂に展示されたのを拝見しましたが、企画のすばらしさと、将来を担う世代へ平泉の理念を伝えていくことの大切さを改めて実

感じました。

平成二十三年、東日本大震災津波で大きな被害を受けた年です。その三カ月後、「平泉の文化遺産」が世界文化遺産に登録されましたが、復興と関連した取組としては「世界遺産平泉 復興応援『祈り鶴（いのりづる）プロジェクト』」があります。町内を中心に数多くの店舗（約八十店舗）の方に参加協力いただき復興への祈りを込めて、折り紙を折ってもらうものです。募金は全額、被災した子供達を支援する「いわての学び希望基金」へ寄付を行うこととしました。また、国内外で開催される平泉PRイベント等で専用ブースを設置、プロジェクトを展開しました。平成二十五年には、人事交流で、



平泉町役場観光商工課に派遣され、町営駐車場の管理・運営、各種商工業務、平泉芭蕉祭全国俳句大会の業務等を担当しております。観光商工課の印象としては、春の藤原まつりから、年末の初詣対応まで、年間を通し、恒例の催事が切れ目なく開催され、多忙な

日々でしたが、地域の皆様と一体となって、催事を盛り上げることができたときの喜びは、いつまでも忘れることはないでしょう。ことに、「平泉芭蕉祭全国俳句大会」は、松尾芭蕉ゆかりの地で五十回以上も開催されている、大変歴史ある大会ですが、昨年は「平泉世界遺産の日」が制定されたことに伴い、「平泉世界遺産の日」主幹事業として、児童・生徒の部参加対象を全県に規模を拡大して開催し、多くの方に投げいただきました。俳句は、子供から大人まで誰でも気軽に参加でき、平泉の文化遺産に理解を深める契機となるという意味でも、意義深い大会だと思いますし、これからも大切に永く受けつがれていかれるべき催事

(金剛院 法嗣)

ヒガンバナ（彼岸花）

「彼岸花には毒があるから、近づいてはいけませんよ。」と、子供の頃に何度か言いかされたことがある。その花の独特の姿は、毒のある植物であることを想像させるのに十分な妖艶さであったから、遠くからその赤い花を確認すると、近づいて毒にやられたりしないように、かなり用心深く草むらを歩いてきた。

調べてみると、確かに彼岸花には毒があるらしい。害獣や害虫が寄らないように、人為的に田んぼのあぜ道に植えられたりしたこともあったという。その生態も独特で、花が咲いている時に葉は一枚もなく、地面から茎だけがすっと伸びて、その先に花が咲いている。花が落ちると、しっかりとした緑

り上げ町を發展させていこうという気持ちです。

昨年九月に、盛岡市中央公民館で開催された中尊寺仏教文化研究所所長・佐々木邦世師の講演会を拝聴させていただきましたが、その講演の中で「平泉に暮らす人だけではなく、平泉を大切に想う人、平泉を愛する人、そのような人と人、人と自然とのつながりを含めて、平泉の町民と考えていかなければいけない」と語っておられたことが、とても印象深く感じられました。

今後も「平泉の文化遺産」は県民全体のかげがえのない貴重な財産として、国内外への情報発信の場や、地域の人材育成、観光振興などへの様々な取組を通して、岩



手県の地域振興に大いに寄与することと思います。

これからも、町「平泉」を大切に思う県内外の皆さんとともに、平泉の街づくりと發展に関わらせていただければ幸いです。

の葉を広げ、再び花を咲かせる日に備えて養分を蓄える。彼岸花は曼珠沙華（極楽に咲く花）とも呼ばれ、その別名はことさら仏教との結びつきを感じさせる。他のどんな花とも似つかないこの花に、人は仏の世界を感じ彼岸の地にいる誰かのことを思い出したのかもしれない。

ある時、彼岸花がたくさん植えられているという公園に行くことがあった。群生する彼岸花は圧巻で、遠くから見ても森の中へ続いてゆく赤い絨毯のように見える程であった。彼岸花畑の中に作られた小道を歩いていると、真っ赤に咲く彼岸花の中に、一本だけ怖いくらいに真っ白な花を咲かせている彼岸花を見つけ、私は少しだけはっとした。なにやらその花が私

にとつて特別な一本、つまり彼岸にいた特別な誰かに見えたからだ。時の流れとともに今はあまり思い出すことがなくなってしまうたあの人。もしかしたら彼岸花は、彼岸の地にいる誰かの、「思い出して欲しい。」という想いが咲かせる花なのかもしれない。



ヒガンバナ

「平和祈念沖繩大会」に思う

清水 真澄

叡山講福聚教会六十五周年「平和祈念沖繩大会」が、去る十月二十九・三十日の二日間に行われ、陸奥本部では、中尊寺・毛越寺支部をはじめとした各支部が、中尊寺の檀信徒さんと共に参加しました。

大会では「あらためて平和を見つめなおそう」というスローガンを掲げ、一日目は「平和祈念法要」が奉修され、二日目には奉詠舞大会・伝統芸能観賞会があり、私たちも東北ブロックとして「浄邦和讃」を発表してまいりました。

二日間の予定の中には、ひめゆりの塔・平和祈念資料館・平和の礎等の見学もあり、戦争の悲惨な情景・醜く悲しい様がいとおこされ言葉を使い、奉詠舞大会では、それぞれに祈りの気持ちを込めた発表となりました。また、東日本大震災と重ね、震災の記憶を絶やさないためにも御詠歌を

通した祈りの気持ちを次の世代に正しく伝えていくことが大切だと感じました。

三泊四日の遠方への旅路でありましたが、世界遺産の首里城・美ら海水族館・万座毛など、沖繩の名所を巡り、楽しいひと時を過ごしました。また檀信徒さんとの交流ができ、良い思い出になりました。参加された皆様、陸奥本部様のご協力・ご支援に感謝申し上げます。

さて明年度は、さっそく東日本奉詠舞大会の開催が六月二十五・二十六日に千葉県南総文化ホールにて決まっております。若い方たちも毎年行われる研修・検定で基本的な力をだいぶつけられているようですので、多くの参加をお願いしたいと思います。詠唱も詠舞もみんな合わせてこそ一つの型となり、響き渡っていくものだと思います。

自分自身の健康のためにも、今年も元気にお唱えし、精進してまいります。

（観音院寺婦・福聚教会中尊寺支部幹事）

新刊紹介

（二〇一四年一月〜十二月）

『平泉文化研究年報 第14号』

岩手県教育委員会 二〇一四・三・二十八

『藤原清衡 平泉に浄土を創った男の世界戦略』

集英社 著・入間田宣夫 二〇一四・九・三十

『日中古代都城と中世都市平泉』

汲古書院 著・吉田 歓 二〇一四・十二

「中世都市」『平泉』はどのように誕生したのか、日中の都城制を詳細に比較し考察する

『後三年記の成立』

汲古書院 著・野中哲照 二〇一四・十二・一

『平泉 北方王国の夢』

講談社（講談社選書メチエ588） 著・斉藤利男 二〇一四・十二・十

『日本美術全集4 平安時代Ⅰ 密教寺院から平等院へ』

小学館 著・伊東史朗 二〇一四・十二・三十



〔関山句囊〕

(平成二十六年六月二十九日 於中尊寺)

〈第五十三回 平泉芭蕉祭全国俳句大会より〉

(當日句入選)

九条に継がれし浄土古代蓮

(大会長賞)

*正木ゆう子選

特選 盛岡 木関 借楽

ひかり堂いでてどくだみ明かりかな (中尊寺賞首賞)

特選 奥州 大石 文雄

硯あり蓮葉の水のひとくちに

(毛越寺賞首賞)

特選 平泉 菅原恵美子

刈り伏せて夏草匂ふ衣川

秀逸 奥州 及川 忠子

会釈して共に旅人梅雨の蝶

秀逸 大崎 砂金 元子

白雨去り雫のなかの光堂

(岩手県知事賞)

*佐治英子選

特選 一関 佐藤 冬扇

遣水の尽きたる池の花あやめ

(河北新報社賞)

特選 盛岡 長谷川かよ子

葱坊主世界遺産の寺畑に

(岩手日報社賞)

特選 奥州 岩淵 正方

涼しきは金色堂の石畳

秀逸 登米 藤野 尚之

雛僧の撞く鐘低く五月雨るる

秀逸 平泉 岩淵眞理子

月見坂下る僧侶の夏衣

秀逸 北上 小笠原志保子

五月雨に和す声明や芭蕉祭

(岩手県議会議長賞)

*小畑柚流選

特選 気仙沼 佐藤 稜泉

平安の音のととのふ堂涼し

(岩手日報社賞)

特選 宮城 鈴木喜久郎

平泉の日や五月雨の翁道

(中尊寺賞)

特選 奥州 菅原 淑子

夢のあとてふ夏草の茂りかな

秀逸 奥州 梅森 サタ

万緑や風に色あり祈りあり

秀逸 豊後大野 渡辺 章禪

万緑の四方を固めし光堂

秀逸 花巻 安部 克詠

万緑や佛はみんな真正面

(平泉町教育長賞)

*小菅白藤選

特選 一関 伊勢田あきを

涼しさは六十五トンの楸邨碑

(岩手日日新聞社賞)

特選 仙台 坂内 佳禰

青蛙薬師の池と心得て

秀逸 奥州 及川 忠子

梅雨兆す走り根世界遺産の日

秀逸 一関 島谷 知華

芭蕉にも届いておりぬ平泉の日

秀逸 盛岡 工藤 幸子

一山は雨に煙りて蓮一華

(岩手県ユネスコ協会連盟会長賞)

*小林輝子選

特選 西和賀 門屋 允子

墨太く平泉の日朱印帳

(平泉文化会議所賞)

特選 北上 伊藤 順子

泰衡の吐息どこかに蓮の花

(岩手日日新聞社賞)

特選 宮城 佐藤 みね

半眼のまなぶた金に青蛙

秀逸 花巻 大平 春子

遣水の尽きたる池の花あやめ

秀逸 盛岡 長谷川かよ子

平泉の日に俳人の集ひけり

秀逸 平泉 岩淵眞理子

うつし世の戦断ちたし蓮の花

(平泉観光協会会長賞)

*照井翠選

特選 奥州 千田 勝子

過客守る泡の法衣の青蛙

(河北新報社賞)

特選 八幡平 佐々木 一夫

もののふのみたまのひかり金亀子

(岩手日日新聞社賞)

特選 奥州 鈴木 利和

遠つ世の栄華を今に蓮開く

秀逸 奥州 伊藤弓流杞

高らかに青胡桃落つ義経堂

秀逸 北上 松田 洋子

(応募句入選)

金粉のし吹く三代杉の花

*正木ゆう子選 (天) 奥市 梅森 サタ

つばめ来るSL銀河遠野駅

(地) 遠市 菊池 伉

梵字ケ池数珠置くごとく花筏

(人) 平泉 岩渕 洋子

朧夜や愚直の重機けものめく

秀逸 気仙沼 佐藤 綾泉

水蹴りて暫し思案の水馬

*佐治英子選 (天) 八尾 穂山 常男

幽閑の吐息を泡に水中花

(地) 奥州 佐藤たけ子

あたたかや眩しがる児を抱きなほし

(人) 奥州 大石 文雄

東稲山の雲を浚ひて畦を塗る

秀逸 一関 小野寺東子

骨寺の村を逆さに田水張る

*小畑袖流選 (天) 奥州 小野寺昭次

影おぼろ齡召されし磨崖佛

(地) 気仙沼 吉田 貞女

この海に生きると決めて若布刈る

(人) 盛岡 菅原けんいち

囀や迦陵頻伽の透かし彫り

秀逸 平泉 鈴木 信

春祭串に刺されしもの多し

*小菅白藤選 (天) 奥州 鈴木 利和

兵も生者も集ふ「平泉の日」

(地) 一関 佐藤喜佐子

仁右衛門島にて平泉の日想ふ

(人) 鴨川 海老根まさる

味噌汁の茄子白く浮く震災忌

秀逸 奥州 木村 文子

春灯をすこし暗めに篝木守る

*小林輝子選 (天) 奥州 小野寺昭次

花粉症月見坂より始まれり

(地) 花巻 市野川 隆

母の日の母のみそ汁すすりけり

(人) 奥州 遠藤カオル

兄となりけふも一人の半仙戯

秀逸 八幡平 佐々木一夫

(半仙戯 「ぶらんこ」の異称)

蓋あけて青空のぞく田螺かな

*照井 翠選 (天) 花巻 浅沼 久男

母の日や墓標ばつんと海を向く

(地) 宮城 鈴木喜久郎

湯治客猿となりけり春の雪

(人) 平泉 佐々木邦世

僧坊の青邨の軸風光る

秀逸 平泉 岩渕 洋子

雨晴るる花の奥より鼓笛隊

秀逸 宗 像 梶原マサ子

(入選重複句は省き、秀逸は編者が適宜に掲出)

児童生徒

岩手県内 小中学校児童生徒の部 (投句総数四一〇句)

涼風にさそわれ歩く月見坂

特選 北上市江釣子小学校五年 長谷川風爽

自転車でモクレンの道一直線

特選 花巻市太田小学校六年 新淵 隼尊

満開の桜へ駆ける百メートル

特選 花巻市太田小学校六年 伊藤 匠

たんぼぼの小さなわた毛空の旅

特選 盛岡市津志田小学校五年 菊池 花凜

スコップにずっしりおもい春の雪

特選 久慈市小袖小学校六年 中川 拓斗

つくしさんよいしよよいしよと顔を出す

特選 花巻市太田小学校六年 佛川 鈴奈

月見坂歩きつかれてかたつむり

特選 宮古市門馬小学校六年 去石 莉子

つばめの子学校育ちがんばれよ

特選 北上市江釣子小学校四年 小田島銀河

ゆかた着て気持ちわくわく夜が来た

特選 一関市大東小学校四年 小山莉々華

炎天下砂上を駆ける戦士たち

特選 九戸村九戸中学校三年 安達 秀馬

しゃぼん玉二人の顔を写し出す

特選 九戸村九戸中学校三年 村田 海斗

あきあかね夕日の色に染まりけり

特選 滝沢市一本木中学校三年 佐々木美里明

平泉町内 小中学校児童生徒の部 (投句総数七一一句)

平泉小学校

夏の峰そびえるすがた堂々と

特選 五年 大内 吏樹

ひまわりは太陽のようたくましい

特選 五年 小松代あさ美

夏の夜空が青くて海みたい

特選 五年 高橋 颯希

長島小学校

夏の空一ぱつぎやく転ホームラン

特選 三年 青木 大知

たけのこはぐんぐんそだつ子どもだよ

特選 四年 佐々木碧紘

かたつむりしとしとあめがうれしそう

特選 二年 山平 葉奈

平泉中学校

青空と葉桜輝く平泉

特選 二年 千葉 健

アスファルト燃える陽炎目がくらむ

特選 三年 滝澤 知紗

教室のとびらガタガタ春一番

特選 三年 遠藤 好夏

「草笛」20句抄

(『俳句』五月号)

「世界遺産のまちから」太田土男

秀衡が跡は田野に麦の秋

太田 土男

積み肥を解くやかげろふ衣川

小林 輝子

栄耀の跡かもしれない畑を打つ

稲玉 宇平

春雷や弁慶像の傍を過ぐ

榊原 康二

梵鐘の余韻の起伏夕桜

高橋 清人

鼻梁より雪解雫や磨崖仏

四戸美佐子

金色堂出でてこの世の白日傘

名久井清流

青荻のつねに風生む毛越寺

岩渕 洋子

遣水にすこしの淀みあめんぼう

大畠 善昭

千年の風を纏ひつ古代蓮

小野寺東子

落ち延びて行く義経へ雷一つ

橋本 韶子

復興へ秘仏を開く豊の秋

桂田 一福

高館に望む刈田の広さかな

佐々木徳子

ふところに評伝西行十三夜

川村 杏平

草の根に届く月光庵寺跡

鈴木きぬ絵

骨寺村雲走りゆく稲の上

清水 芳子

金色の雪降りゐるか平泉
みちのくの光は黄金帰り花
笹子鳴く義経堂のあたりかな
うっし世の浄土庭園日脚伸ぶ

小菅 白藤
佐藤 レイ
北田 祥子
合川 勸

(平成二十六年二月〜二十七年一月)

復興の牛歩の如し遠雪崩

『寒雷』 六月号

若松美保子

若葉して降りみ降らずみ光堂

『寒雷』 九月号

小野寺束子

万緑やお膝豊けき新本尊

『寒雷』 十月号

佐藤 瑞穂

法の庭余白なきまで散紅葉

『草笛』 二月号

岩淵 洋子

三代の栄耀遠き枯蓮

『草笛』 四月号

瀧口 千尋

山霊を抱きて雪の大文字

『草笛』 四月号

佐藤 千洋

関山の鐘の余韻や去年今年

『草笛』 四月号

稲玉 宇平

トーストのぴよんと飛び出す義経忌

『草笛』 六月号

星川修一郎

遣水の水音清し露の臺

『草笛』 六月号

八重樫榮子

遣水の宴の水落つ青田かな

『草笛』 十月号

菊池 尚久

楸邨碑たむける萩に風を添へ

『草笛』 十二月号

佐藤 千洋

〔平泉七句〕

夏草の夢ごとごとく鹹しわからき

光堂もまた蝸の薄羽なり

東征の詔みことり とや鬼蜻蛉

金蠅は俘囚の丘に降り立ちぬ

〔新春詠〕

「読売新聞」¼ 文化

千年余撞き減りたるを除夜の鐘

冤霊えんれいてふ言葉聞きたる冬の寺

金色を雪に包めりほ灰明かり

正木ゆう子

一望の奥六郡や稲の花
北方に伝説多し真葛原
金箔を打ち延ばすごと鳥渡る
曲水流觴旅人もまた水であり

句集『地祇』

渡辺誠一郎



毛越寺羽觴しゅうを飛ばす花の宴

「読売俳壇」¼ 矢島渚男選

仙台 上郡 長彦

この街は寂しすぎると帰省の子

「読売俳壇」¼ 矢島渚男選

一関 木村 成幸

西行が命なりけり花便り

一関俳協 四月 佐々木邦世

束稲山の影落ちてゐる刈田かな

一関俳協 十月 小野寺束子

光堂夢の名残を時雨虹

一関俳協 十一月 岩沼 幸江

鴉去つて大姉も居士も雪浄土

一関俳協 十二月 佐々木邦世

平成二十六年 (平泉) 『たばしね』より

去年今年旧梵鐘の黙しけり

『たばしね』 一月号 鈴木 信

凍て解くる千手ゆるびし観世音

『たばしね』 初句会 岩淵 洋子

木の芽風鍵持ち走る雛の僧

『たばしね』 四月号 千葉志津子

木の芽風演能のぞく作の神

『たばしね』 五月号 鈴木 四郎

羅^{うすもの}を浄土の風と羽織る朝

『たばしね』 六月号 千葉志津子

庭浄む僧の袂に秋暑あり

『たばしね』 九月号 北嶺 澄照



〔関山歌籠〕

(平成二十六年四月二十九日)

〈第三十五回西行祭短歌大会〉

*小池 光選

女童のあるがごとしも実生より育つ紅梅二十

五の花 (中尊寺貫首賞)

奥州 阿部 洋子

ふるさとに賢治が押したるトロツコの線路の

跡が今も残れる (平泉町長賞)

一 関 畠山 喜一

風雪に倒れたる松むらむらと起き上がらんか
丘の斜面に (平泉観光協会長賞)

奥州 菊池トキ子

シドニーに永住せむと子の言ふを受けとめて
あるわれに驚く (岩手日報社賞)

一 関 名須川万里世

歳晩の五重塔に雪は舞ひほとけのにははしづ
かに暮れぬ (IBC岩手放送賞)

東京 涌井ひろみ

砂の色もつ観音像は津波後のくろく輝く海見
つめたつ (岩手日日新聞社賞)

盛岡 藤井 永子

御神事能番組

平成二十六年五月四日

法楽
古実式三番

開口 佐々木五大 大鼓 三浦 章興
祝詞 千葉 快俊 小鼓 菅原 光聰
若女 菅野 澄円 笛 清水 秀法
老女 破石 晋照 後見 佐々木秀厚

狂言

梶山伏 兄 北嶺 航 弟 菅原 光哉
山伏 破石 晋照

後シテツレ 佐々木五大

前シテツレ 佐々木亮王

能

竹生島 シテ 北嶺 澄照 大鼓 三浦 章興
ワキ 菅野 成寛 大鼓 千葉 快俊
ツレ 佐々木秀厚 小鼓 佐々木仁秀
アイ 破石 晋照 笛 清水 広元

五月五日

開口 佐々木五大

狂言

梶山伏 兄 菅原 光哉 弟 北嶺 航
山伏 破石 晋照

後シテ 佐々木五大

能 前シテ 北嶺 澄照

田村 ワキ 佐々木秀厚 大鼓 佐々木長生
アイ 破石 晋照 小鼓 菅原 光聰
笛 清水 秀法

秋の藤原まつり 中尊寺能 十一月三日

能 後シテ 佐々木五大

枕慈童 シテ 佐々木五大 大鼓 三浦 章興
ワキ 佐々木秀厚 大鼓 千葉 快俊
ツレ 佐々木亮王 小鼓 菅原 光聰
笛 清水 秀法

〔陸奥教区宗務所報〕

第二部 中尊寺関係

平成二十五年十二月一日〜平成二十六年十一月三十日

□ 平成二十六年

二月十四日

会場 都道府県会館

不活動法人対策会議

社会主任 菅野康純出席

三月十一日

於一部観音寺

東日本大震災祥月命日法要

陸奥教区内寺院二十二名出仕・一部ご詠歌参加



四月十三日

於中尊寺

布教師養成所並び一隅支部長研修会

布教師養成所講師 仏庭師 山本宗石氏

講演「非行対策―少年院と更生―」

一隅総本部による一隅支部長研修

山内より十八名参加



六月二十三日〜二十四日 於延暦寺

天台宗保護司会民生児童委員会研修会・総会

地藏院 佐々木秀圓出席

七月二十八日～三十日 於大正大学
教師研修会（C群）

山内より四名参加

八月二十六日～二十九日 於比叡山・西塔「居士林」

教師安居会 観音院（嗣）清水秀法参加

九月四日～七日

総本山駐在布教 金剛院（嗣）破石晋照任命

九月六日 於毛越寺

二部檀信徒会二隅大会

山内より住職三名檀徒八名参加

集まった浄財 五九、〇〇〇円は地球救援募金へ

十月三日 於毛越寺

天台宗住職研修会 山内より三名参加

十一月七日～八日 七日於宗務庁 八日於叡山学院

中央布教研修会 布教師会副会長 菅野康純参加

十一月十六日 於藤田寺

天台宗一斉托鉢 山内より三名参加

集まった浄財 一五七、〇〇〇円は地球救援募金へ

十一月二十一日 於宗務庁

天台宗人権啓発公開講座 委員三浦章興参加

□ 役職任免

（平成二十六年一月十六日）

一隅を照らす運動監事

大長寿院 菅原光中

（平成二十六年四月一日）

天台宗総合研究センター研究員

眞珠院（副）菅野澄円

（平成二十六年四月一日）

教区布教師会副会長

瑠璃光院 菅野康純

（平成二十六年七月一日）

天台宗人権啓発委員会企画委員

法泉院 三浦章興

□ 住職任命

（平成二十五年十二月一日）

願成就院兼務住職 破石澄元

（平成二十六年一月十五日）

東福寺兼務住職 北嶺澄照

（平成二十六年三月七日）

正覚院代表役員代務者 菅野康純

（平成二十六年四月十一日）

常住院住職 佐々木長生

（平成二十六年八月八日）

仙岳院代表役員代務者 菅原光中

（平成二十六年十月一日）

金色院兼務住職 山田俊和

□ 褒賞

（平成二十六年十一月五日）

一宗公職歴任表彰 葉樹王院 北嶺澄照

□ 教師補任

（平成二十六年四月二十一日）

大僧正 中尊寺 山田俊和

□ 得度履修

（平成二十六年九月十五日）

大徳院法嗣 千葉宥司

□ 開壇伝法履修

（平成二十六年九月十五日）

常住院法嗣 佐々木亮王

執務日誌抄

平成二十五年十二月一日

二十六年十一月三十日

平成二十五年

◇十二月

- 一日 月次大般若(本堂)
宇部貞宏氏市勢功労者受賞
祝賀会(貫首 於ペリーノホテル
南館廣太郎氏瑞寶雙光章受
章祝賀会(執事長 於武蔵坊)
- 二日 三千院門跡飯入山式(貫首)
- 四日 平成二十五年度平泉町交通安
全運動推進町民大会(管財章
興 於役場)
- 六日 秋期一山会議(大広間)
- 七日 薬師会(讚衡蔵)



- 八日 大矢那宣氏町勢功労者受賞
祝賀会(執事長・参与秀圓・邦世
於武蔵坊)
- 九日 境内一斉清掃
- 十一日 東日本大震災物故者追善回
向月命日法要(本堂)
- 十二日 平泉観光協会理事会(執事長)
- 十三日 中尊寺節分講中総会
- 十四日 弥陀会(本堂)
- 十五日 骨寺村莊園米奉納

平成二十六年

◇一月

- 一日 〇時 新年祈禱護摩供修行
七時半 東山町(若水送り)着
九時半 正月祈禱護摩(本堂)
十時半 総礼
- 修正会 釈迦供(本堂)
堂籠り(五日 結衆 開山堂)
- 二日 九時半 正月祈禱護摩(本堂)
修正会 薬師供(峯薬師、讚衡蔵)

- お経を読む会(円教院)
- 十七日 白山会(本堂)
- 十九日 ネクスコ東日本代表取締役社長
廣瀬博氏来山(貫首)
- 二十二日 讚衡蔵運営委員会
- 二十四日 文殊会(経蔵)
- 二十七日 宮古市郷土芸能保存会訪問
(総務快俊・晋照)
- 二十八日 恒例御供餅つき
- 三十一日 午後三時 一山総礼

- 十五日 誦初め(広間)
- 三日 九時半 正月祈禱護摩(本堂)
修正会 山王供(山王堂)
- 十一時 元三会 慈恵供(本堂)
- 四日 修正会 薬師供(留璃光院薬師堂)
- 五日 修正会 文殊供(経蔵)
- 大般若会(本堂)
- 六日 修正会 釈迦供・月山供(釈迦堂)
- 七日 修正会 白山十一面供(本堂)
大般若会(本堂)
- 八日 修正会 弥陀供(金色堂)
修正会 薬師供(讚衡蔵)
- 一字金輪仏法衆・千手観音
法衆

- 十七日 佐々木宗生師河北新報賞表
彰式(貫首 於仙台国際ホテル)
- 二十五日 わらび座戎本みろ氏来山(貫首)
北上川RCA「国際文化交流
フォーラム」(貫首・執事長 於
ペリーノホテル)
- 二十六日 本寺地区地域づくり推進協
議会十周年記念式典(貫首)
静岡県知事川勝平太氏来山(邦
世案内)
- 文化財防火訓練

- 修正会結願
恒例「金盃披き」
十三時半
- 十一日 東日本大震災物故者追善回
向月命日法要(本堂)
- 十四日 慈覚会(御影供 本堂)
お経を読む会(貫首)
- 十六日 一隅を照らす運動理事会(貫
首 於宗務庁)



- ◇二月
- 一日 月次大般若(本堂)
- 二日 恒例大節分会(関取隠岐の海開
招く。歳男歳女七十三名、町内園児)
- 三日 節分会(本堂)
- 九日 トヨタ自動車顧問内川晋氏来
山(貫首)
- 十一日 東日本大震災物故者追善回
向月命日法要(本堂)
- 十四日 平泉観光協会理事会(執事長)

十五日 涅槃会(本堂)
お経を読む会(円乗院)

十六日 天台寺保存修理工事安全祈願法要(澄順師・光中師・秀圓師・広元師 於天台寺)

二十日 真宗仏光寺派滋賀南教区様団参(総務快俊)

二十二日 オボエ奏者キャシー・ミリケン氏来山(貫首・執事長)

二十六日 平泉観光協会通常総会(執事長 於平泉商工会)

◇三月

一日 月次大般若(本堂)

第十四回世界遺産講演会(講師 近藤誠一氏、貫首 於武蔵坊)

二日 元文化庁長官近藤誠一氏来山(参与邦世案内)

三日 陸前高田献花台回向(貫首 芭蕉像作者戸津圭之介氏来山(執事長挨拶))

平泉文化観光振興基金運営委員会(執事長 於役場)

六日 青蓮院門跡名譽門主東伏見慈治大僧正本葬(貫首)

九日 北上川RCA文化セミナー(講師 長島時子氏、貫首・参与光中 於ペリーホテル)

十日 栃木教区壬生寺様来山(執事長 岩手県観光協会賛助会員全員協議会(総務快俊 於ホテル 東日本盛岡))

十一日 俳人矢島渚男氏来山(参与邦世案内)

東日本大震災物故者追善回向月命日法要(本堂)

十三日 菊まつり協賛会役員会(広間)

十五日 世界文化遺産登録三周年市笑さん記念公演(執事長 於武蔵坊)

十六日 大矢邦宣先生を偲ぶ会(貫首 於日メトロポリタン盛岡NW)

十七日 AED講習会(十八日・二十日)

十九日 基衡公御月忌(胎曼供 本堂)

二十四日 開山会(護摩供 本堂)
讚衡藏運営委員会

二十六日 三千院門跡堀澤祖門師晋山式(貫首・執事長)
岩手県訪日外国人誘客・受入研修会(総務晋照 於ホテル 東日本)

二十八日 平泉町観光審議会(執事長 於役場)

◇四月

一日 月次大般若(本堂)

四日 御修法「鎮将夜叉大法」(十一日、貫首 於延暦寺)

五日 第四十回天台陸奥教区仏教青年会総会(執事長 於毛越寺)

六日 故大矢邦宣先生を偲ぶ会(執事長 於平泉文化センター)

八日 仏生会(本堂)
お経を読む会(釈尊院)

十日 平泉観光協会理事会(執事長)

十一日 東日本大震災物故者追善回向月命日法要(本堂)

十二日 天台宗陸奥教区寺院婦人会総会(法務宏紹 於泉橋庵)

十四日 春の藤原まつり警備会議(執事長・管財澄円・章興 於芭蕉館)

十七日 光圓寺様団参(総務光聰案内) 中尊寺ハスを広める会株分けセレモニー(十九日、貫首・総務快俊 於台北市内)

二十日 花まつり子供大会(於平泉文化遺産センター)
檀徒総代・世話人会総会(執事長他 於武蔵坊)

二十二日 弁慶力餅競技会保存会総会(参与秀厚 於芭蕉館)

二十三日 平泉商工会青年部通常総会(法務宏紹 於大沢温泉)

二十四日 桜友会清掃奉仕(於北坂)
平泉観光推進実行委員会総会(執事長 於役場)

平泉町世界遺産推進協議会

お経を読む会(真珠ノ澄円)
平泉古事の森育成協議会(管財章興 於役場)

春期一山会議(天広間)

二十日 法隆寺展拝観(貫首・随行亮王 於仙台市博物館)

二十一日 本堂御本尊建立一周年写真展「説法印のお釈迦さま」(五月六日、本堂)



二十二日 春彼岸会法要(法華三昧 本堂)
源義経公東下り行列保存会

二十九日 西行法師追善法要(本堂) 第三十五回西行祭短歌大会(講師 小池光先生「短歌のたのしさ」)

◇五月

一日 春の藤原まつり開幕 藤原四代公追善法要 稚児行列 郷土芸能奉演(一関 行山流舞 川鹿子躍)

二日 開山護摩供(開山堂)



- 郷土芸能奉演(江刺 行山流角 懸麗躍/一閑 市野々神楽) 春の藤原まつり「源義経公東下り行列」レセプション(貫首・執事長 於武蔵坊)
- 三日 源義経公東下り行列(義経公役 俳優山本裕典) 郷土芸能奉演(衣川 川西念佛 劍舞)
- 四日 古実式三番 能 「竹生島」 狂言 「梟山伏」 郷土芸能奉演(胆沢 行山流部 鳥鹿踊/平泉 達谷窟毘沙門神楽 /胆沢 朴ノ木沢念仏劍舞) 神輿渡御(友和念)
- 五日 古実式三番 「開口」 能 「田村」 狂言 「梟山伏」 郷土芸能奉演
- 六日 山王講(山王堂)
- 八日 中尊寺菊まつり協賛会総会
- (参拝秀厚・管財澄円 於平泉文化 遺産センター)
- 久世旭如氏、筑前琵琶奉納 演奏(本堂)
- 三日 日本に健全な森をつくり直す委員会(かんざん亭)
- 四日 伝教会(御影供 本堂) 中尊寺一山共済互助会総会
- 八日 法華経一日頓写経会(本堂) 第二十二回ふるさと平泉会総会(総務快俊 於浅草ビューホテル)
- 九日 貫首 インタビュー(BSFジ 「古寺名刹 こころの百景」)
- 十日 花巻温泉会会長今井洋一氏・社長 安藤昭氏来山(貫首) 貫首 インタビュー(岩手日 日新聞社)
- 十一日 京都教区穴穂行弘師来山(参与 秀圓)
- 東日本大震災物故者追善回 向月命日法要(本堂)
- 十二日 大僧正補任辞令親授式(貫首

- (天広間)
- 九日 古都ひらいずみガイドの会 通常総会(総務快俊 於泉橋庵)
- 十一日 お経を読む会(法泉院) 東日本大震災物故者追善回 向月命日法要(本堂)
- 十三日 一関警察官友の会役員会(執事長 於一関警察署)
- 十四日 平泉町世界遺産推進協議会 総会(執事長 於役場)
- 平泉ユニバーサルデザイン 観光推進会議(執事長 於役場) ウェーサカ仏教会役員会・ 総会(法務宏紹 於一閑松竹)
- 十五日 高野山真言宗恵光院団参(総務 快俊案内)
- 十六日 四寺廻廊総会(執事長・総務快 俊・光聰・法務康純 於仙台市電通 東日本)
- 十七日 第十七回仙台青葉能(貫首・随 行亮王 於仙台電力ホール)
- 十八日 淡交会県南支部茶会(茶室・ 於比叡山延暦寺)
- 池田智鏡師来山(黒石寺住職藤 波洋香師案内)
- 十三日 四寺廻廊法要(会場 中尊寺) 貫首 インタビュー(岩手日 報社)
- 十四日 富岡八幡宮司富岡長子氏来 山(貫首挨拶・参与邦世案内)
- 世界遺産平泉の日制定記念 シンポジウム(貫首 於岩手県 公会堂)
- 十五日 綱雄会夏期錬成会(金春流山 井綱雄社中 於能舞台)
- 北原雅彦 JAZZ Session(か んざん亭)
- 貫首 講話(於茨城県小美玉市 生涯学習センター)
- 十七日 平成二十六年教育旅行誘致 宣伝部会総会(総務晋照 於い わて県民情報交流センター)
- 十八日 山形薬師寺様団参(執事長挨拶・晋照案内)

- 広間)
- 十九日 平泉菊花会総会(管財章興 於 花みずき)
- 二十一日 福島大千寺様団参(成寛案内) 平泉芭蕉祭全国俳句大会実 行委員会(総務快俊 於役場)
- 一関地区交通安全協会理事 会(執事長 於ペリーノホテル)
- 中尊寺新能の会(総務快俊 於 観光協会)
- 二十二日 平泉商工会通常総会(執事長 於平泉商工会館)
- 二十五日 曲水の宴(執事長 於毛越寺)
- 二十八日 一関地区交通安全協会通常 総会(執事長 於ペリーノホテル)
- ◇六月
- 一日 月次大般若(本堂) 世界遺産登録三周年記念関 連事業オープニングセレモ ニー及び超小型モビリティ ラッピングカーお披露目式
- 日本に健全な森をつくり直 す委員会(二十二日) 長 於いつくし園)
- 十九日 一関警察官友の会総会(執事 長 於いつくし園)
- 二十日 自在房蓮光忌法要(本堂) 第六十四回社会を明るくする 運動平泉町推進委員会(執事 長 於保健センター)
- 二十一日 三千院門跡小堀光詮前御門 主一周忌法要(貫首 於三千院)
- 二十五日 貫首 講話(毎日メトロポリタ ンアカデミー 於ホテルメトロポ リタン東京)
- 二十六日 平泉をきれいにする会総会 (管財章興 於役場)
- 二十七日 弁慶力餅競技保存会研修会 (参拝秀厚 於大沢温泉)
- 二十八日 盛岡ユネスコ協会創立六十五周年 記念公演「野村万作・萬斎狂 言会」(貫首・亮王 於盛岡市民文 化ホール)
- 二十九日 第五十三回芭蕉祭全国俳句大

会(本堂・大広間)

駐日タイ王国特命全權大使タナ
ティップ・ウパテイシン氏
来山(執事長案内)
平泉町世界遺産登録記念碑
除幕式(貫首・執事長 於役場前)
「平泉世界遺産の日」制定記念世界
遺産登録三周年記念フォー
ラム(執事長 於平泉小学校体育館)

◇七月

- 一日 月次大般若(本堂)
- 二日 佐川急便取締役管理担当竹内章
氏来山(執事長案内)
貫首 講話(於一関警察署)
- 五日 ウェーサカ式典(法務宏紹・総
代五名 於龍澤寺)
- 六日 平泉町消防団第五分団研修
旅行(〓七日、管財章興 於会津
若松方面)
源義経公東下り行列保存会
研修旅行(〓七日、総務光聰

- 三日 中尊寺子屋(自由研究に
取り組む会)(総務晋照 境内)
 - 四日 世界平和の祈り式典(貫首
於延暦寺)
十五時半(平和の鐘)打鐘
 - 七日 夏堂籠り(〓十一日、結衆、開
山堂)
 - 十日 中尊寺子屋(総務晋照 境内)
 - 十一日 東日本大震災物故者追善回
向月命日法要(本堂)
 - 十三日 荒了寛師来山(貫首応接)
 - 十四日 第三十七回中尊寺新能
能 「花月」
能 「水汲」
能 「鵜飼」
 - 十五日 長島時子氏来山(管財章興)
山崎理恵子氏、合作画制作
(本堂前)
- 平成二十六年平泉町成人式
(総務快俊 於平泉文化遺産セン
ター)

於山形方面)

- 八日 叡山文庫訪問(澄元・澄円・五大)
平泉水かけ神輿警備会議
(管財章興 於平泉商工会館)
- 十日 金鶏山経筒拝観(貫首・参与他
於平泉文化遺産センター)
- 十一日 東日本大震災物故者追善回
向月命日法要(本堂)
- 十三日 如法写経十種供養会(写経奉
納式)

- 十六日 平泉観光協会理事会(執事長)
- 十七日 清衡公御月忌(胎曼供 本堂)
- 十九日 前平泉町消防団副団長佐藤幸男
氏瑞宝単光章叙勲受賞祝賀
会(参拝秀厚 於武蔵坊)
- 二十日 富岡八幡宮神輿総代連合会
との交流会(執事長 於武蔵坊)
- 二十一日 平泉総社神輿渡御
- 二十二日 延暦寺執行小堀光實師来山(貫
首・執事長他 広間)
- 二十一日 一ノ関駅長菅伸二氏来山(貫首)
- 二十二日 ウィーンフィル奉納コン

- 十六日 バスキングジャパン様、奉
納演奏(本堂)
- 第十七日 富岡八幡宮神輿渡御(貫首参
観 於富岡八幡宮)
- 二十日 毛越寺施餓鬼会(執事長)
- 河北新報社元社長一力一夫氏
お別れの会(参与邦世 於ホテ
ルメトロポリタン仙台)
- 二十一日 戸津説法(獅子王圓泰師)聴
聞(貫首 於東南寺)
- 二十三日 施餓鬼会御速夜(本堂)
- 二十四日 大施餓鬼会・放生会(本堂)
お経を読む会(貫首)
- 二十五日 文化庁文化財参事官岡本公秀氏
来山(白山神社能舞台調査)
- 多田孝文師来山
- 二十六日 釜石市芸文協会訪問(参与邦
世・総務快俊)
- 二十九日 九州西教区研修会講師 澄円
於ホテルニュープラザ久留米市)
- ウエーサカ仏教会臨時役員

サート(能舞台)

- 二十四日 大正大学人間環境学部様来
山(執事長挨拶)
- 二十五日 新成会(貫首 於明治記念館)
- 二十六日 貫首 講話(「青空説法」 随行
晋照 於多聞院伊沢家久那斗神社)
五郎沼・古代蓮まつり(参与
秀圓・随行光聰 於紫波町)
- 平泉総社神輿会「神酒開き」
(総務快俊 於泉橋庵)
- 二十八日 天台寺保存修理現地見学会
(〓二十九日、貫首・参与三名、澄元)
大文字送り火警備会議(管財
澄円・章興 於芭蕉館)
- 三十日 桜友会清掃奉仕(於北坂)
東芝ライテック関連会社様
来山(貫首挨拶)

◇八月

- 一日 月次大般若(本堂)
- 二日 金澤翔子奉納作品と山崎理
恵子「世界の三千八百人合

会(法務 於大祥寺)

- 三十日 龍玉寺恒例大施餓鬼会(参与
光中 於龍玉寺)
- 三十一日 蜂神社例大祭(管財章興 於紫
波町)

◇九月

- 一日 月次大般若(本堂)
- 瀬見亀割観音祭礼(宏紹 於
最上町亀割観音堂)
- 平泉町上下水道事業運営協
議会(管財章興 於役場)
- 岩手日報社社長東根千万億氏
来山(貫首 於応接)
- 三日 泰衡公御月忌(金曼供 本堂)
- 五日 平泉町長青木幸保氏来山(貫
首・執事長 於応接)
- 六日 陸奥教区第二部檀信徒会ミ
ニ一隅会(執事長 於毛越寺)
- 北上川RCA総会(貫首・執
事長 於ベリーノホテル)
- 七日 達谷西光寺蝦蟇ヶ池辯天堂

- 御修復落慶法要(執事長・真珠院・大長寿院 於達谷西光寺)
駐日エジプト・アラブ共和国大使館特命全權大使ヒシヤム・エルジメテイー氏来山(貫首挨拶・案内)
- 九 日 来訪者管理戦略策定に関する説明会(管財澄円 於平泉文化遺産センター)
両磐酒造創業七十周年並びに平成二十六年全国新酒鑑評会金賞受賞祝賀会(貫首於ベリノホテル)
- 十一日 平泉ユニバーサルデザイン観光推進会議(執事長 於武蔵坊)
東日本大震災物故者追善回向月命日法要(本堂)
- 十二日 境内山林管理に関する指針説明会(講師 京都大学名誉教授竹内典之氏 於庫裡広間)
- 十三日 五郎沼薬師神社例大祭(参与秀圓 於同神社)
- 十一日 三陸郷土芸能奉演(宮古 南川日さん踊り/大船渡 甫嶺獅子舞)
鶴澤美枝子氏、君が代独唱(本堂)
- 十二日 三陸郷土芸能奉演(宮古 津軽石さん踊り/釜石 鶴住居虎舞)
- 十三日 三陸郷土芸能奉演(大槌 城山虎舞/釜石 桜舞太鼓)
- 十七日 貫首 講演(群馬教区一隅大会 浄土宗埼玉教区様団参(執事長挨拶))
日本に健全な森をつくり直す委員会講演会(役場)
- 十九日 福島教区不動院様団参(章典案内) お経を読む会(大徳院)
- 二十日 菊まつり開闢法要
- 二十二日 表千家水月会全国大会茶会

- 十四日 彼岸会写経の会(金色院)
- 十五日 山内大徳院法嗣得度式
- 十七日 藤原経清公命日祭(参与光中 於奥州市江刺区)
- 白符忌(本堂)
- 十九日 赤堂稲荷例祭(護摩供)
- 二十一日 彼岸会坐禅の会(金色院)
- 二十三日 秋彼岸会法要(本堂)
お経を読む会(常住ノ長生)
- 二十四日 造幣局理事長新原芳明氏来山(貫首挨拶)
- 二十五日 駐日メキシコ合衆国大使館一等書記官アレハンドロ・バサーニェス氏来山(貫首挨拶・案内)
- 二十七日 一関地方親と子の写生大会
- 二十八日 くらぶ海音(一)支援に感謝、ありがとうコンサート(本堂)
- 二十九日 貫首 講話(日本オストミー協会交流会様三十五名 於かんざん亭)
- ウエーサカ仏教会臨時総会(法務 於大祥寺)
- 二十三日 貫首 講演(江戸川仏教会様 東京)
- 二十五日 中尊寺文書調査(二十六日) 貫首 講話(江戸川高等学校 窓会様 於本堂)
- 二十六日 貫首 講演(秋田県湯沢市了翁禅師研究会様 於湯沢文化会館大ホール)
- 二十八日 秀衡公御月忌(金曼供 本堂)
- ◇十一月
- 一日 秋の藤原まつり開幕
藤原四代公追善法要
稚児行列
郷土芸能奉演(一関 行山流舞川鹿子踊)
- 二 日 菊供養会(本堂)
お経を読む会(貫首)
- 二 日 月次大般若(本堂)
- 平泉町社会福祉大会(総務快俊 於武蔵坊)
- 平泉観光協会理事会(執事長 於青龍殿)
- 四 日 青蓮院門跡青龍殿落慶法要(貫首 於青龍殿)
- 七 日 京都教区様団参(貫首講話、快俊・宏紹案内)



くらぶ海音コンサート

- 郷土芸能奉演(胆沢 朴ノ木沢念仏剣舞/江刺 行山流角懸鹿踊/平泉 達谷窟毘沙門神楽/胆沢 行山流都鳥鹿踊)
- 三日 中尊寺能「枕慈童」、謡・仕舞(二葉きり園、一関・平泉喜喜桜会奉納 能舞色)
- 五 日 境内古道・史跡踏査(七日)
- 六 日 群馬常住寺様四十名団参(貫首挨拶・康純案内)

- 九 日 一山利生院結婚式(本堂)
- 十日 写経奉納式(本堂)
- 陸奥教区第三部檀信徒会様
団参(快俊案内)
- 十一日 東日本大震災物故者追善回
向月命日法要(本堂)
- 滋賀教区様団参(貫首挨拶・快
俊案内)
- 十二日 一隅を照らす運動四十五周
年記念大会(貫首・随行秀法
於郡山ユラックス熱海)
- 十三日 貫首 講演(第三十回リビング
ネットワーク全国大会 於仙台ロ
イヤルパークホテル)
- 十五日 菊まつり表彰式(大広間)
- 十七日 第二五世天台座主渡邊恵進親
下密葬(貫首 於滋賀院門跡)
- 十九日 野村万作氏芸歴八十年「万
作を観る会」(参与邦世 於国
立能楽堂)
- 二十三日 長野常然寺様団参
天台会御逮夜(本堂)

- 二十四日 天台会(御影供 本堂)
- 茨城県小美玉市生涯学習セ
ンター様来山(貫首挨拶)
- 二十六日 日光山輪王寺別院中禅寺様団
参(執事長挨拶・宏紹案内)
- 平泉町上下水道事業運営協
議会(管財章興 於役場)
- 二十九日 一山大徳院法嗣結婚式(本堂)
- 三十日 大工棟梁・山田雪氏岩手県
卓越技能者受賞祝賀会(貫首
他 於武蔵坊)

御奉納者 御芳名

- 一 菜種油 二斗
平泉町 平泉なのはな会様
- 一 地藏尊前掛け並びに帽子 二百九十枚
岐阜県 牧谷美紀子様
御母様
- 一 中尊寺平和合作画 一点
茨城県 山崎理恵子様
- 一 紺紙金字経 経切 一幅
仙台市 菅原道子様
- 一 水彩画「源義経公」 三葉
東京都 大原梨恵子様

書作品「夢」

一 書作品「妙法蓮華経如来寿量品(抄)」

東京都 金澤翔子様



浄財御奉納者 御芳名

平成二十五年十二月〜平成二十六年十一月

海鋒 守様 五万円
 (有)平泉観光写真社様 五十万円
 サントリー芸術財団様 二十五万円
 立正佼成会 盛岡教会様 三万円
 立正佼成会 花巻教会様 三万円
 念法真教 総本山 金剛寺様 五万円
 表千家 水月会 本部・岩手支部様 六十二万六千円
 浄土宗岩手教区様 五万円
 千葉教子様 六万円
 壬生寺様 三万円
 鈴木紀子様 三万円
 栃木県食品衛生協会 今市・日光支部様 三万円
 千葉宗裕様 三万円
 光圓寺様 三万円
 素心会 清水早苗様 五万円
 岡田一江様 五万円
 (一社) 茶道裏千家淡交会岩手南支部様 十五万円

(株)JTB国内旅行企画様

大千寺 畑善徳様 三万円
 久世旭如・沖美幸様 五万円
 (有)千葉恵製菓様 十万円
 佐藤芙蓉様 十万円
 佐藤芙蓉・和堂先生を偲ぶ会様 十万円
 林佑子様 五万円
 立石寺様 三万円
 富岡八幡宮 富岡長子様 十万円
 洞川小住 利行様 五万円
 大正大学様 三万円
 天台宗京都教区様 三万円
 浄土宗埼玉教区様 五万円
 多田孝文様 十万円
 吉水宗吾様 七万円
 天台宗信越教区 伊那部様 五万円
 中央七法会 会長 市野澤忠夫様 三万円
 常住寺様 十万円
 一関信用金庫 平泉支店様 三万円
 (順不同)

不動産篤篤信御奉納者 御芳名

平成二十五年十二月〜平成二十六年十一月

中野区 中村武司様 十万五千元
 平泉町 川嶋印刷(株) 菊地慶矩様 十万円
 和泉市 辻林正博様 六万円
 一関市 (有)豊隆軌道 千葉幸八様 六万五千元
 奥州市 佐々木 久様 五万円
 旭川市 渡邊良弘様 五万円
 秋田市 木村英夫様 四万七千元
 栗原市 千葉幸春様 四万円
 宮城県 小山利男様 三万五千元
 富谷町 橋本晋栄様 三万五千元
 一関市 (株)東北鉄興社様 三万円
 新宿区 (有)シー・エヌエス様 三万円
 登米市 阿部充子様 三万円
 銚子市 (株)イクオリティー 石毛裕之様 三万円
 平泉町 一関信用金庫平泉支店様 三万円
 盛岡市 (株)光羽建設 伊藤光明様 三万円
 気仙沼市 菊地 仁様 三万円

一関市 佐藤和子様 三万円

一関市 山平様 三万円
 一関市 一八 渋谷正幸様 三万円
 栗原市 菅原君子様 三万円
 一関市 (株)精茶百年本舗様 三万円
 平泉町 千葉製材所 千葉芳美様 三万円
 盛岡市 中村京子様 三万円
 北上市 平野絵里様 三万円
 宮城県 山口 昇様 三万円
 南三陸町 横浜キミ様 三万円
 盛岡市 横山まり子様 二万円
 福島市 野口芳子様 二万円
 盛岡市 松原晴樹様 季毎御供物
 新潟市 工藤一男様 季毎御供物
 青森県 米沢 励様 季毎御供物
 二戸市 (有)ベル美容室 高橋紀美世様 季毎御供物
 大仙市 藤枝恵枝子様 季毎御供物
 奥州市 大門屋様 金色ダルマ(特大)2体

▽ 本号でもたくさんの方の寄稿を頂戴し、節目の寺報「関山」第二十号の発行を迎えることができました。本棚に並んだ「関山」を読むたびに、多くの人々に支えられ今日まで歩んできた中尊寺の歴史が伝わってきます。「寺と皆様の架け橋」として、次の十年で「関山」が何をすべきか考えることを次号編集までの自分への宿題としたいと思います。

▽ 大晦日の夜、本堂脇の御札所で降りしきる雪を見上げていると、小学校低学年くらいの見慣れない男の子が一人、母親と一緒に私のところへやってきた。彼が差し出した手には年賀状が握られており、「夏の寺子屋ではありがとうございました。よい年になりますように。」と、かわいい文字で書かれていた。夏休みに開催した「中尊寺の歴史を勉強する会」に参加してくれた縁で中尊寺が好きになり、足を運んでくれたという。一枚の年賀状で、ゆく年もくる年も良い年になるような気がした。

(破石晋照)

寺報「関山」は、中尊寺ホームページで閲覧が可能です。ぜひ利用下さい (<http://www.chusonji.or.jp/>)。

中尊寺(寺報)「関山」第二十号

平成二十七年(二〇二五)二月一日

発行 中尊寺

(執事長 清水広元)

〒〇三九一四一九五

岩手県平泉町字衣関二〇二

編集 中尊寺仏教文化研究所

印刷 川嶋印刷(株)



〈発行 中尊寺〉